

埼玉古墳群の埴輪編年

城倉正祥

はじめに

稲荷山古墳の後円部礫槨から出土した「辛亥銘鉄剣」、日本書紀安閑紀「武蔵国造争乱」の伝承など、埼玉古墳群は考古学と文献史学を結ぶ謎を秘めた古墳群である。後期を通じて同じ場所に大型古墳が営まれる稀有な古墳群であると同時に、遺構・遺物の質・量ともに卓越した内容を誇る埼玉古墳群は、関東の古墳研究史上、常に重要な位置を占めてきた。発掘調査に基づく考古学の緻密な遺構・遺物の分析、文献史学の視野の広いアプローチなど、東国古代史を巡るダイナミックな議論が蓄積されてきた、まさに夢の舞台である。

しかし、考古学の根幹である編年という点に関して言えば、埼玉古墳群の編年はまだ確立したとは言えない。様々な要素をもつ古墳の編年は、多角的に検証されるべきなの言うまでもないが、墳丘規格・埋葬施設・副葬品・供献土器など、どの要素を取り上げてみても、現状では全ての古墳を通して編年を確立できる要素とは言えない。その点において全古墳の通時的分析が可能な埴輪は、最も編年に有効な要素であると言える。だが、その埴輪研究においても、未だ体系的な分類を踏まえた編年は確立していないのが現状である。埴輪編年が確立できなかった原因は複数あるが、最大の問題は首長墓では当たり前に見られる現象―複数生産地からの供給、その実態を把握することができなかった点にある。

本稿は、この最大の問題点を克服し、埼玉古墳群の確固たる埴輪編年を確立する。それは、東国古代史のダイナミックな展開を実証的に位置付けるための基礎作業に他ならない。

1 埼玉古墳群における埴輪研究の現状と課題

1-1 埼玉古墳群の編年と埴輪研究

埼玉古墳群の編年研究に関しては、長い歴史がある。しかし、埼玉古墳群の中で埋葬施設が発掘されている古墳は、稲荷山古墳・將軍山古墳に限られ、出土土器もそれほど多くはない。また、墳丘規格・周溝形態・主軸のブレや立地論など様々な角度から編年が試みられているが、単一の要素で通時的に分析が可能なのは埴輪しかない。

それ故に、埴輪の分析が埼玉古墳群の編年の最も重要な要素とされてきた。しかし、各報告書で編年は試みられているものの、埼玉古墳群出土埴輪を通時的・体系的に分析した研究は、岡本健一と若松良一の業績に限られる。必然的に、埼玉古墳群の埴輪編年を確立するためには、両氏の研究が出発点となる。まずは、その成果を概観し、現状の問題点と課題を明確化する。

1-2 若松良一「追加樹立説」の問題点

時間的には逆転するが、最初に若松良一の分析成果について検討する。若松は、埼玉古墳群の最新の発掘成果である稲荷山古墳の報告書の中で、埼玉古墳群出土埴輪全体の編年を論じている（若松2007）。

まず、若松は稲荷山古墳出土埴輪の特徴について、「バラエティに富み、型式学的にみた場合、同一集団が一定の技法に従っていちどきに製作したもの（同一型式）ではない」とする。実際の分析作業では、円筒埴輪を4大分類（A～D類）し、さらに規格差で12分類（A 1・A 2・A 3・A 4・B 1・B 2・B 3・C 1・C 2・D 1・D 2・D 3）に細分する。そして、「4大分類が工人集団の相違を示している可能性が高いのであるが、型式学的に見て、なお時間差も存在するもの」と結論付ける。しかし、若松自身が「同一時期の所産でないと証明することも容易ではない」と吐露し、「決定的な方法に苦慮した末に、稲荷山古墳と埼玉古墳群の各古墳の埴輪資料のクロスチェックを試み」とするよう、集団差と時間差をどの要素において峻別するのかの戦略がないままに追加樹立を前提とした編年を展開していく。

若松は埼玉古墳群出土埴輪を、1期～6期に編年し、7期として中の山古墳の須恵質埴輪壺を位置付ける。今、若松の編年表に基づいて各期の該当類型を取り上げれば以下ようになる。

【1期】稲荷山A 2・A 3・A 4

【2期】稲荷山B 1・B 2、二子山A 1 a・B、愛宕山C

【3期】稲荷山C 1・C 2、二子山A 1 a・C、丸墓山A 2、天祥寺裏

【4期】二子山A 1 b・瓦塚A 1・A 3・B、奥の山A、愛宕山A 1

【5期】稲荷山D 1・D 3、二子山A 1 a、瓦塚A 2・A 4、愛宕山B、將軍山A・C 1・C 2、鉄砲山A

【6期】將軍山B・鉄砲山B 1・B 2・B 3

【7期】中の山

この編年に従えば、A類（利根川右岸の未知の窯）、B類（生出塚窯）、C類・D類（和名窯か周辺の未知の窯）が、埼玉古墳群の各古墳にいずれも追加樹立されたことになる。だとすれば、各期における初出が古墳の造営時期となるので、若松の編年では稲荷山→二子山・愛宕山→丸墓山・天祥寺裏→瓦塚・奥の山→將軍山・鉄砲山→中の山の築造順序となり、およその編年が確立されたことになる。

さて、仮に埼玉古墳群における埴輪の生産体制が以上の通りであったとすれば、若松はかなり複雑な生産体制の様相を明解に読み解いていることになるだろうが、果たして正しい結論に到達しているのだろうか。大分類によって集団差を抽出する点はともかくとして、若松の方法論では時期差をどのようにして導き出しているかについて明確な説明がなされていない。そもそも若松が言う「型式差」とは、共通の特徴を有する埴輪群とその分類単位間の差異を示していると思われるが、その背後にある産地の違い・時間差・集団差・個人差などを重層的に分析・峻別する作業がないままに、ある特徴は集団差、またある特徴は時間差に置き換えるという主観的な分類に基づく議論だと考える。それ故に、結論として示された「追加樹立編年案」も混乱に満ちたものとなっている。

若松は最後に、「埴輪は古墳築造の一環として、たった一度しか設置されていないと思いこんで埴輪研究に臨んでいる研究者は少なくない」と聞く。（一中略一）追加樹立に注目すれば、より詳細な埴輪研究を展開することが可能となろう」と結ぶ。しかし、明確な基準がないままに、持論である「追加樹立説」（若松1982）に基づいて、一古墳出土埴輪の多様性を結果的には安易に「時間差」のみに集約させている点において、若松の議論はかなり危うい土台に立っている。

一方、近年の埴輪研究では、特に大型古墳において複数系統の埴輪が樹立されることは、むしろ

一般的である点が認識されるようになり（中井2003、廣瀬2003・2006、古谷2003など）、その背後に埴輪生産の歴史性を読み解こうとする研究が進められている。さらに、集団差を示す系統識別を踏まえた上で、系統毎の変遷を追う作業（轟1973・犬木2005・城倉2009など）が行われている研究状況にあって、系統内分析の視点を欠く若松の分析手続きは甚だ不十分なものである。

以上、最新の研究状況を踏まえても、若松の「追加樹立先ありき」の編年論は、埴輪の編年研究自体の土台を曖昧なものにする危険があると考ええる。私は、埼玉古墳群に供給された生出塚窯産埴輪を刷毛目データベースの構築によって特定した上で、生出塚遺跡における窯の切り合い関係から編年を確立し、生出塚窯産埴輪に関して言えば追加樹立は存在していなかった事実を既実証している（城倉2010a）。このような成果からすれば、今必要とされている分析は各古墳における分類成果を踏まえた上で、系統毎の変遷過程を追いかける作業である。若松が提示した「追加樹立を前提とする」編年論は、主観的な前提と誤った分析手順によって導き出されたもので、その分析方法・結論ともに根本的に間違っていると思う。もちろん、若松が長年行ってきた基礎作業は高く評価されるべきだと考えるし、基礎作業に基づいた結論を否定するのは本意ではない。しかし、若松が稲荷山古墳報告書の付図2として作成した「埴輪の複数回樹立を仮定した埼玉古墳群の円筒埴輪編年案」は、著しく客観性に欠けた混乱した編年案で、この編年が埼玉古墳群の埴輪編年として一般化するのには、今後の埼玉古墳群の編年研究において大きな障害となりかねないし、埼玉古墳群の歴史的位置付けを誤った方向に導く可能性もある。

では、若松の議論の問題点はどこにあるのか。それは、①系統分類における基準が曖昧な点、②各系統内における変遷過程を通時的に位置付ける視点と方法論が欠如している点、この2点に集約されると言ってよい。この問題点を克服し、若松の「追加樹立編年案」を完全に覆す必要がある。

1-3 岡本健一「系統分類」の重要性

一方、將軍山古墳出土埴輪の詳細な分類を踏まえて、埼玉古墳群の全体編年を論じた岡本健一の成果は明確な方法論と精度の高い分析が評価される（岡本1997）。岡本は、將軍山古墳出土の円筒埴輪を、形態・製作技術・胎土・色調からA～C類に分類し、各類を「明らかに別の工人集団によって作られたもの」とする。その成果を踏まえた上で、埼玉古墳群における全ての埴輪が、①赤系、②橙系、③黄白色系に分類できることを指摘し（明確な峻別が難しいものもあるとするが）、各系統の埴輪にみられる円筒埴輪の突帯扁平率を調べた。これによって、各系統の円筒埴輪の突帯が扁平化していく方向性を明らかにし、稲荷山・二子山・丸墓山→愛宕山・瓦塚・奥の山→鉄砲山・將軍山の編年案を提示した。

後述するように將軍山古墳における岡本の分類は精度が高く、刷毛目工具の同定や同工品の視点から見ても、かなりの的を射た分析だと考える。さらに、將軍山古墳での岡本の分類基準は、そのまま埼玉古墳群の全古墳出土埴輪の分類に適用が可能である。岡本が指摘する黄白色・橙褐色・赤褐色の3分類は、私も生産集団の違いを反映するものと考えており、これらの分類を埼玉古墳群の全ての古墳に適用することで系統差を抽出できると考える。

さらに、系統差を抽出した上で、系統毎にその変遷過程を追う方法論も首肯できる。ただ、各系統の変遷過程を突帯の扁平率のみで導きだそうとした岡本の分析はやはり不十分である。円筒埴輪の形態的特徴や製作技法、あるいは形象埴輪も踏まえた上で、各系統の変遷過程を位置付ける必要

がある。そして、その作業によって各古墳の各系統の埴輪がしっかりと縦軸でスムーズに繋がるのであれば、若松の主張する「追加樹立説」を覆すこともできよう。

結論を先に言えば、埼玉古墳群の埴輪は大きく3系統に分類でき、各系統の埴輪はスムーズな型式学的変遷を辿ることが分かっている。つまり、岡本の分析を踏襲し、各古墳の分類と古墳群全体を貫く分類を常にフィードバックしながら、その型式的特点の変遷過程を位置付けることこそが、今やらなければならない作業だということが分かる。

2 分析視角

2-1 古墳内分析と古墳間分析

上述した研究史の整理で、問題点と課題が浮かび上がってきた。ここでは本稿の分析視角についてまとめる。

まず埼玉古墳群の各古墳には、複数生産地の製品が供給されているという事実が分析の出発点となる。これに関して言えば、埼玉古墳群出土埴輪のうち、生出塚窯産埴輪は全てその生産窯まで特定できているし(城倉2010a)、桜山窯周辺で生産された埴輪も部分的ながら特定している(城倉2010b)。つまり、物理的な証拠から複数生産地の製品が運ばれている事実が確認されているわけである。さらに、埼玉古墳群に埴輪を供給していたと考えられる生産遺跡―生出塚窯・和名窯・桜山窯・姥ヶ沢窯・権現坂窯の発掘成果により、生産地毎の埴輪の特徴が次第に明らかになりつつある。それら生産地の成果を踏まえれば、埼玉古墳群の各古墳出土埴輪の分析で、生産地の違いを示す分類が可能である。

分析作業では、これら生産地の特徴把握を踏まえた上で、一古墳を単位として分類を行い、その分類単位間の型式的距離を測っていくことになる。実際にはその作業はそれほど困難なものではなく、円筒埴輪・形象埴輪ともに、形態・製作技術・胎土の相関から整合的な分類が可能であるし、その妥当性は生産遺跡との刷毛目の一致からも確認することができる。そして、各古墳の分類を踏まえた上で、古墳群全体を通時的に見れば、埼玉古墳群全体では、やはり岡本が指摘した大きく3系統が認識できる。本稿では、①黄白色系統、②橙褐色系統、③赤褐色系統と呼称する。このように、一古墳出土埴輪の分類(古墳内分析)と、古墳群全体を貫く分類(古墳間分析)をフィードバックすることで、生産集団の差異を把握することができ、各系統の展開過程を考究できる。

2-2 埼玉古墳群出土埴輪の大別と生産地の推定

では、埼玉古墳群に供給された各系統の生産地が問題となる。

まず、③の赤褐色系統については、そのほとんどが刷毛目の同定作業によって、生出塚窯産製品だと判明しており、その生産窯まで特定している。さらに、生出塚遺跡においては、八手状の窯が相互に切り合いを持つことから、窯の物理的前後関係によって埴輪の編年が確立している。すなわち、天祥寺裏→二子山→瓦塚→奥の山→愛宕山→將軍山→鉄砲山に関しては、既に生産窯の物理的前後関係という動かない編年を組んでいる(城倉2010a)。また、生出塚遺跡の分析では、窯の切り合いで離れた類型が埼玉古墳群の一つの古墳で共伴することはないという事実を把握しており、埼玉古墳群に供給された生出塚窯産埴輪に関しては、追加樹立は全く行われていない点を確認している。このように、生出塚窯産埴輪はかなり様相が明らかになっているが、①②の系統との系譜関係

と並行関係を明らかにしていく必要がある。

問題となるのは①黄白色系統、②橙褐色系統の生産地である。

まず、①黄白色系統について言及する。黄白色系統の円筒埴輪は、客体的なB種ヨコハケ・半円透孔・小穿孔・突帯板押圧技法・最上段が長い形態など特徴的な埴輪群で、埼玉古墳群以外の出土例も比較的多い。例えば、とやま古墳（塩野1967）、鎧塚古墳（寺社下1981）、新屋敷古墳群（高崎1992、田中1994、金子・大谷1996、昼間・大谷1998）、月輪古墳群（関口・市川2008）、屋田古墳群（横川1984）、下道添遺跡（渡辺1981・坂野1987）、古凍古墳群（横川1984）などいずれも5世紀末～6世紀初頭とされる古墳から出土している。共伴する形象埴輪も古手の様相を呈し、上毛野を含めた北関東地域の広い範囲で共通性の高い埴輪群である。特に、北武蔵地域の黄白色系統は、胎土の共通性が極めて高く、実際に古墳を超えて刷毛目が一致する例も確認できるので、かなり限定された場所で、特定の集団によって生産された可能性が高いと判断している。若松は稲荷山古墳出土埴輪の胎土分析で火山岩類が検出されたことから、「群馬県域の火山地帯と連絡する利根川筋の沼沢地」に候補が求められるとし、利根川右岸の未知の窯を想定する（若松2007）が、いずれ生産地が発見される可能性も期待されるので、現状で結論を急ぐ必要はない。ここで重要なのは、この黄白色系統が5世紀末～6世紀初頭において、広く共通する特徴をもった埴輪群で、特に北武蔵においては生産地がある程度集約されていたという事実である。当然ながら、6世紀前半以降に展開する埴輪群の母体となる系統だったと推察され、その位置付けを考えていく必要がある。

最後に②橙褐色系統について言及する。橙褐色系統に関しては、赤褐色系統や黄白色系統に比べて、特徴が多様で偏差も大きく存在時間幅も長い。当然ながら複数の生産地の埴輪を含んでいることが予想されるが、それらを現状では明確に峻別することはできない。しかし、二子山古墳から出土した方形透孔の大型円筒埴輪（5-22-1）は、桜山埴輪窯で焼台として使用されていた埴輪（桜山9-1・9-6）に見られる桜山G類の刷毛目で調整され、比企地方の諏訪山7号周溝・毛塚32号墳埴輪棺（宮島2003・大谷2006）とも刷毛目が一致するなど桜山窯産、あるいはそれを遡る段階の製品である点が判明している。さらに、瓦塚古墳から出土した人物埴輪（調5-7-8・4-38-212）と動物埴輪（8-53-153）は、やはり桜山窯に至近の毛塚28号墳C類と刷毛目が合致するなど、桜山周辺産であることが分かっている。私が「プレ桜山」と呼称するこの埴輪群（城倉2010b）は、6世紀前半段階に下松5号墳（江原・長井2004）、岩鼻古墳群（宮島1989・江原1993）、新屋敷古墳群、月輪古墳群など比企・北埼玉を中心に分布し、波状ヘラ記号のある円筒・弓を貼りつけた板を持つ人物・扉表現のある家形埴輪、など非常に共通性が高い一群である。さらに、この「プレ桜山」は、6世紀後半における生出塚窯産埴輪の南への製品供給圏拡大の前に、東京湾まで伝播したことが分かっている。例えば、柊塚古墳（野沢1992・照林2001）、東宮下地内出土品（笹森1988）、亀塚古墳（狛江市史編纂委員会1985）、登山1号墳（今津1992・稲村1997）などが明らかに「プレ桜山」の影響を受けた埴輪を出土する古墳である。このように橙褐色系統の中でも、「プレ桜山・桜山」のように生産地がある程度絞り込めている埴輪群が存在する一方で、生産地が特定できない個体群も多い。この橙褐色系統をどのように位置付けるべきか。

私は比企・大里に分布する窯を分析する中で、この地域の窯は6世紀第2四半期以降においては、基本的に周辺の中小古墳へ埴輪を供給しながら、埼玉古墳群の首長墓の造営に際してのみ大型品を供給していた点を明らかにした（城倉2010b）。この成果から考えるのであれば、橙褐色系統の埴輪

において生出塚窯産埴輪のような規則的な変遷を追えない点も十分に納得できる。「拠点生産地」として埼玉古墳群に大・中型品を供給し続けた生出塚窯（山崎1981・1987・1994・1999・2001・2002・2004・2005・2006）と、「衛星生産地」として比企・大里に点在しながら断続的に埼玉古墳群へ埴輪を供給した姥ヶ沢窯・権現塚窯（新井・森田1998）、桜山窯（横川1982）、和名窯（金井塚1983・弓2003）の製品の存在形態が異なっているのは至極当然である。逆に言うと、埼玉古墳群における橙褐色系統の存在形態自体が、比企・大里地方の生産窯の歴史性を物語っているということもできる。おそらく黄白色系統の強い影響で成立した橙褐色系統の埴輪は、6世紀前半段階には「プレ桜山」を中心に盛行期を迎え、6世紀第2四半期以降は生出塚窯製品にその座を取って代わられる。その後は、基本的に地域密着型の生産を行っていた比企・大里地方の窯から断続的に埼玉古墳群へ大型品が供給されたというのが橙褐色系統の大枠だと推察される。このように、比企・大里地方の窯製品を橙褐色系統と認識するわけだが、橙褐色系統は①大型円筒の第1段が長い点、②胎土に砂粒が多い点など生出塚窯産埴輪とは明らかに異なる特徴を持っている。具体的な生産地の特定はできなくとも、現状では橙褐色系統を「比企・大里産」として一つのまとまりで認識し、その大枠での変遷を位置付けるとともに、今後、窯の調査の進展に合わせて生産地の特定を進めていくのが現実的だと思われる。

以上、埼玉古墳群の大別分類と生産地の関係を整理した。以下にまとめておく。

- ①黄白色系統—生産地は特定できないが5 C末～6 C初に集約された場所で生産された埴輪群。
- ②橙褐色系統—比企・大里の複数窯の生産品。6 C前半の「プレ桜山」の展開が特徴。
- ③赤褐色系統—生出塚窯産埴輪。6 C第2四半期以降、埼玉古墳群の主体を占める。

2-3 系統整理の重要性

以上のように埼玉古墳群出土埴輪を3大別する。その上で、各系統の変遷過程を位置付け、順調な型式変化が認められるかを確認する。注意すべきは、これら各系統の埴輪はそれぞれに系譜的派生関係を持ち、同時期に併存しながらも盛行時間幅が前後する事実である。大枠で言えば、①黄白色系統→②橙褐色系統→③赤褐色系統の順序で、それぞれが生産の最盛期を迎えるのだが、これら3系統の埴輪相互の関係を埴輪の形態・技術面を加味して全体の流れの中で位置付ける必要がある。この作業によって各系統のスムーズな展開過程を認識できるのであれば、当然ながら若松の「追加樹立説」は完全に否定できるはずである。

この系統整理の作業は、埼玉古墳群の首長を頂点とする地域社会の中で、各埴輪生産集団がどのように活動していたのかを明らかにする作業に他ならない。現在の埴輪研究では、系統把握に基づく特定系統の展開を追う作業が主体であるが（犬木2005など）、そこからさらに一步踏み込んで一つの地域社会を単位とした系統間の複雑な展開過程を考究すべきである。その作業によって、地域社会の文脈の中で埴輪生産の歴史性を追求する必要がある（城倉2009）。

2-4 本稿の分析手順

最後に実際の分析手順をまとめておく。まず、埼玉古墳群の各古墳を単位として集団差を示すと考えられる分類を行う。円筒埴輪・形象埴輪の形態・技術・胎土の相関によって群別を確立する。なお、刷毛目が共通する類型に関しては、現在までの生産遺跡の分析で、限られた工人によって限

第 1 表 埼玉古墳群出土土輪の分析表①

【稲荷山古墳】						新48-20						新48-24						新48-25						新48-26						新50-34						新52-43						新52-44						新53-46						新53-49						新53-52						新69-131						新78-23						新78-27						調研報16-9-30						調研報16-9-31						調研報18-4-129						調研報18-5-139						調研報18-5-140						調研報18-6-142						調研報18-10-187						調研報19-1・2						調研報19-3・5						1 集61-3						1 集61-4						1 集61-5						1 集61-6						1 集62-1						1 集62-4						1 集62-5						1 集62-6						1 集62-7						新49-27						新49-32						調研報16-6-13						調研報16-9-28						1 集62-2						1 集64-3						1 集62-3						1 集76-17						1 集54-3						1 集54-5						1 集58-3						1 集58-6						1 集58-7						1 集59-3						1 集59-11						1 集60-7						1 集71-6						新49-28						新52-45						調研報17-9-76						調研報18-15-213						【丸墓山古墳】						個体番号						刷毛目						土色帖						色調						器種・条数						群別																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
個体番号						刷毛目						土色帖						色調						器種・条数						群別						Hue5YR6/8						Hue5YR6/8						Hue5YR6/8						Hue2.5YR6/8						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6						Hue5YR6/6					

第 1 表 埼玉古墳群出土埴輪の分析表②

6 集22-9	—	Hue2.5YR5/8	赤	雷電山復古型	C
6 集22-10	—	Hue5YR7/8	橙	円筒破片	C 2
6 集22-11	—	Hue5YR7/8	橙	円筒破片	C 2
6 集22-12	—	Hue5YR7/8	橙	円筒破片	C 2
【天祥寺裏古墳】					
個体番号	刷毛目	土色帖	色調	器種・条数	群別
31集5-7	TS1(生出塚 W4)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4 条)	A
31集7-20	TS1(生出塚 W4)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4 条)	A
31集8-24	TS1(生出塚 W4)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4 条)	A
31集9-27	TS1'(生出塚 W4')	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4 条)	A
31集9-28	TS1(生出塚 W4)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4 条)	A
31集10-32	TS1'(生出塚 W4')	Hue2.5YR6/8	橙	円筒(4 条)	A
31集13-59	TS1(生出塚 W4)	Hue2.5YR5/8	赤	人物	A
31集17-78	TS1'(生出塚 W4')	Hue2.5YR5/8	赤	馬破片	A
31集18-92	TS1(生出塚 W4)	Hue2.5YR5/8	赤	馬	A
31集4-1	TS2'(生出塚 W1')	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4 条)	A
31集4-2	TS2/TS2'(生出塚 W1/W1')	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4 条)	A
31集4-3	TS2(生出塚 W1)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4 条)	A
31集5-4	TS2'(生出塚 W1')	Hue2.5YR6/8	橙	円筒(4 条)	A
31集5-5	TS2(生出塚 W1)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4 条)	A
31集5-6	TS2(生出塚 W1)	Hue2.5YR6/8	橙	円筒(4 条)	A
31集5-8	TS2(生出塚 W1)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4 条)	A
31集5-9	TS2(生出塚 W1)	Hue2.5YR6/8	橙	円筒(4 条)	A
31集6-11	TS2'(生出塚 W1')	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4 条)	A
31集6-12	TS2(生出塚 W1)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4 条)	A
31集7-16	TS2(生出塚 W1)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4 条)	A
31集7-17	TS2(生出塚 W1)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4 条)	A
31集7-22	TS2(生出塚 W1)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4 条)	A
31集8-23	TS2(生出塚 W1)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4 条)	A
31集9-29	TS2/TS2'(生出塚 W1/W1')	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4 条)	A
31集9-30	TS2(生出塚 W1)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4 条)	A
31集13-58	TS2(生出塚 W1)	Hue2.5YR5/8	赤	人物	A
31集14-60	TS2(生出塚 W1)	Hue2.5YR5/8	赤	盾持人	A
31集14-61	TS2(生出塚 W1)	Hue2.5YR5/8	赤	盾持人	A
31集16-73	TS2'(生出塚 W1')	Hue2.5YR5/8	赤	鳥	A
31集17-81	TS2(生出塚 W1)	Hue2.5YR5/8	赤	馬	A
31集18-82	TS2(生出塚 W1')	Hue2.5YR5/8	赤	馬	A
31集18-93	TS2/TS2'(生出塚 W1/W1')	Hue2.5YR5/8	赤	形象器台	A
31集飯1	TS2'(生出塚 W1')	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4 条)	A
31集17-74	—	Hue2.5YR5/8	赤	馬	A
31集17-77	—	Hue2.5YR5/8	赤	馬破片	A
31集馬鈴一括	—	Hue2.5YR5/8	赤	馬	A
31集10-31	TS5	Hue5YR7/6	橙	円筒破片	B
31集15-67	TS3	Hue5YR8/4	明茶	盾(群馬系)	C
31集15-68	TS4	Hue5YR8/4	明茶	帽子(群馬系)	C
【二子山古墳】					
個体番号	刷毛目	土色帖	色調	器種・条数	群別
5 集23-3	—	Hue10YR8/3	黄白	円筒(5 条)	A
5 集30-64	—	Hue10YR7/3	黄白	円筒破片	A
5 集45-259	—	Hue10YR8/3	黄白	鳥	A
5 集23-2	FT2	Hue5YR7/8	橙	円筒(5 条)	B
5 集22-1	FT4(飯山 G)	Hue5YR6/6	橙	円筒(5 条)	B
5 集29-61	FT6	Hue7.5YR7/6	橙	円筒破片	B
5 集27-27	FT9	Hue5YR6/8	橙	円筒破片	B
5 集26-25	FT12	Hue2.5YR7/8	橙	円筒破片	B
5 集26-18	—	Hue2.5YR7/8	橙	円筒破片	B
5 集26-19	—	Hue2.5YR7/8	橙	円筒破片	B
5 集30-67	—	Hue5YR6/8	橙	円筒破片	B
5 集33-92	—	Hue2.5YR6/8	橙	人物	B ?
5 集26-22	FT1(生出塚 DE8)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
5 集46-284	FT1(生出塚 DE8)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
5 集46-294	FT1(生出塚 DE8)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
8 集18-100	FT1(生出塚 DE8)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(5 条)	C
5 集24-4	FT3	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(5 条)	C
5 集43-231	FT5	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
5 集37-146	FT7	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
5 集26-23	FT8'(生出塚 M6')	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
5 集27-30	FT8(生出塚 M6)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
5 集31-79	FT8'(生出塚 M6')	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
5 集32-86	FT8'(生出塚 M6')	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
5 集36-139	FT8(生出塚 M6)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(5 条)	C
5 集36-145	FT8(生出塚 M6)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
5 集30-66	FT10	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
5 集26-20	FT11	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
5 集26-21	—	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
5 集26-24	—	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
5 集26-26	—	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
5 集26-31	—	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
5 集30-68	—	Hue2.5YR5/8	赤	朝顔	C
5 集31-80	—	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
5 集31-81	—	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
5 集32-83	—	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
5 集32-87	—	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
5 集33-89	—	Hue2.5YR4/8	赤	盾破片	C
5 集33-99	—	Hue2.5YR4/8	赤	人物破片	C
【瓦塚古墳】					
個体番号	刷毛目	土色帖	色調	器種・条数	群別
調研報5-6-7	KZ5	Hue7.5YR8/4	黄白	人物	A
調研報6-2-3	KZ5	Hue7.5YR8/4	明橙	人物	A

8 集41-30	KZ9	Hue5YR6/6	明橙	円筒(4 条)	A
4 集39-213	KZ11	Hue7.5YR8/4	黄白	人物	A
8 集54-154	KZ11	Hue7.5YR8/3	黄白	鳥	A
4 集19-83	KZ20	Hue7.5YR8/3	黄白	円筒破片	A
4 集19-84	KZ20	Hue7.5YR8/3	黄白	円筒破片	A
4 集19-85	KZ20	Hue7.5YR8/3	黄白	円筒破片	A
4 集20-86	KZ20	Hue7.5YR8/3	黄白	円筒破片	A
4 集13-6	—	Hue7.5YR8/3	黄白	円筒破片	A
4 集13-10	—	Hue7.5YR8/3	黄白	円筒破片	A
4 集20-87	—	Hue7.5YR8/3	黄白	円筒破片	A
4 集22-97	—	Hue7.5YR8/3	黄白	円筒破片	A
8 集50-119	—	Hue7.5YR8/4	黄白	円筒(4 条)	A
8 集50-123	—	Hue7.5YR8/4	黄白	馬	A
8 集51-126	—	Hue7.5YR8/4	黄白	馬	A
8 集51-149	—	Hue7.5YR7/4	橙	人物	A ?
調研報5-3-1	—	Hue10YR8/3	黄白	大刀	A
調研報5-4-2	—	Hue7.5YR7/3	黄白	人物	A
調研報5-5-5	—	Hue7.5YR8/4	明茶	人物	A
4 集38-212	KZ3(毛塚28号 C)	Hue5YR6/4	橙	人物	B
8 集53-153	KZ3(毛塚28号 C)	Hue5YR6/6	橙	猪	B
調研報5-7-8	KZ3(毛塚28号 C)	Hue5YR6/4	橙	盾持人	B
4 集21-90	KZ4	Hue2.5YR6/4	橙	円筒破片	B
4 集21-95	KZ4	Hue2.5YR6/4	橙	円筒破片	B
4 集23-116	KZ4'	Hue5YR6/6	橙	朝顔	B
4 集37-211	KZ4	Hue5YR6/6	橙	人物	B
7 集21-7	KZ4'	Hue2.5YR6/6	橙	円筒破片	B
7 集22-17	KZ4'	Hue7.5YR7/4	明茶	円筒破片	B
8 集52-152	KZ7	Hue5YR6/6	橙	鳥	B
4 集23-115	KZ8	Hue2.5YR5/6	赤	朝顔	B
8 集39-21	KZ8	Hue2.5YR6/8	橙	円筒(4 条)	B
8 集37-1	KZ10	Hue5YR6/6	橙	円筒破片	B
7 集35-169	KZ12	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4 条)	B
4 集23-113	KZ13	Hue2.5YR6/8	橙	大型円筒	B
8 集55-165	KZ17	Hue5YR7/6	橙	円筒破片	B
4 集12-4	—	Hue2.5YR6/8	橙	円筒破片	B
4 集12-5	—	Hue5YR7/6	明茶	円筒破片	B
4 集39-216	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	B
7 集35-168	—	Hue5YR7/6	橙	円筒(4 条)	B
8 集40-24	—	Hue5YR7/8	橙	円筒破片	B
8 集50-117	—	Hue5YR6/8	橙	円筒破片	B
8 集50-118	—	Hue5YR6/8	橙	円筒破片	B
8 集50-121	—	Hue5YR7/6	橙	円筒(4 条)	B
調研報6-1-1	—	Hue5YR7/6	橙	家	B
4 集33-189	KZ1'(生出塚 DE8')	Hue2.5YR5/6	赤	家	C
4 集34-190	KZ1'(生出塚 DE8')	Hue2.5YR5/8	赤	盾	C
4 集35-191	KZ1'(生出塚 DE8')	Hue2.5YR5/6	赤	盾	C
4 集36-208	KZ1'(生出塚 DE8')	Hue2.5YR5/8	赤	馬	C
8 集41-31	KZ1(生出塚 DE8)	Hue2.5YR4/8	赤	円筒(4 条)	C
8 集55-161	KZ1(生出塚 DE8)	Hue2.5YR4/8	赤	円筒破片	C
4 集23-114	KZ2'	Hue2.5YR5/8	赤	大型円筒	C
4 集32-188	KZ2	Hue2.5YR5/6	赤	家	C
8 集55-160	KZ6	Hue5YR6/8	赤	人物	C
8 集40-28	KZ10'	Hue7.5YR8/4	明茶	朝顔	C
8 集37-4	KZ14	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
8 集40-26	KZ15	Hue10YR8/3	明茶	円筒破片	C
8 集39-23	KZ16	Hue2.5YR5/8	赤	朝顔	C
4 集20-89	KZ18	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
4 集20-88	KZ19	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
4 集35-192	—	Hue2.5YR5/8	赤	盾	C
8 集51-150	—	Hue2.5YR5/8	赤	人物	C
調研報5-4-3	—	Hue2.5YR5/8	赤	人物	C
調研報5-5-4	—	Hue2.5YR5/8	赤	人物	C

【奥の山古墳】

個体番号	刷毛目	土色帖	色調	器種・条数	群別
7 集11-61	OY7	Hue2.5YR7/8	橙	円筒破片	A
7 集11-69	OY7	Hue2.5YR7/8	橙	円筒破片	A
7 集11-71	OY7	Hue2.5YR7/8	橙	円筒破片	A
7 集11-74	OY7	Hue2.5YR7/8	橙	円筒破片	A
7 集12-1	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	A
7 集12-2	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	A
7 集12-3	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	A
7 集12-4	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	A
7 集12-5	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	A
7 集12-6	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	A
7 集12-7	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	A
7 集12-10	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	A
7 集12-11	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	A
7 集12-13	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	A
7 集12-14	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	A
7 集12-15	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	A
7 集14-47	—	Hue5YR6/6	橙	家破片	A
7 集14-48	—	Hue5YR6/6	橙	家破片	A
7 集7-5	OY1	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4 条)	B
7 集7-2	OY2(生出塚 DE13)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4 条)	B
7 集8-3	OY2(生出塚 DE13)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	B
7 集10-43	OY2(生出塚 DE13)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	B
7 集10-48	OY2(生出塚 DE13)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	B
7 集7-1	OY3	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4 条)	B
7 集8-16	OY4(生出塚 DE19)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	B
7 集8-18	OY4(生出塚 DE19)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	B
7 集8-23	OY4(生出塚 DE19)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	B

第 1 表 埼玉古墳群出土土輪の分析表③

7 集8-15	OY5(生出塚 DE12)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	B
7 集8-19	OY5(生出塚 DE12)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	B
7 集8-7	OY6'(生出塚 DE6')	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	B
7 集7-3	—	Hue2.5YR6/8	赤	円筒(4 条) B	
7 集7-4	—	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4 条) B	
7 集12-9	—	Hue2.5YR5/8	赤	人物破片	B
7 集12-12	—	Hue2.5YR5/8	赤	人物破片	B
7 集12-16	—	Hue2.5YR5/8	赤	人物破片	B
7 集12-17	—	Hue2.5YR5/8	赤	人物破片	B
7 集14-41	—	Hue2.5YR5/8	赤	穀破片	B
7 集14-42	—	Hue2.5YR5/8	赤	形象破片	B
7 集14-43	—	Hue2.5YR5/8	赤	形象破片	B
7 集14-46	—	Hue2.5YR5/8	赤	家破片	B
7 集14-49	—	Hue2.5YR5/8	赤	家破片	B

【愛宕山古墳】

個体番号	刷毛目	土色帖	色調	器種・条数	群別
3 集24-89	AT1	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(3 条) A	
3 集25-90	AT1	Hue5YR6/6	橙	円筒(3 条) A	
3 集24-91	AT1	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
3 集25-92	AT1	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
3 集26-94	AT1	Hue5YR7/8	橙	円筒破片	A
3 集27-113	AT1	Hue5YR7/2	灰	円筒破片	A
3 集27-114	AT1	Hue2.5YR6/8	赤	円筒破片	A
3 集29-128	AT1	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
31集9-3	AT1	Hue10YR7/3	明茶・灰	円筒(3 条) A	
31集9-4	AT1	Hue10YR7/3	明茶・灰	円筒(3 条) A	
31集10-5	AT1	Hue2.5YR6/8	橙	円筒(3 条) A	
31集14-34	AT1	Hue2.5YR6/4	橙	人物	A
31集16-66	AT1	Hue2.5YR6/8	橙	人物	A
3 集16-13	AT5	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(3 条) A	
3 集25-93	AT5'	Hue5YR6/6	橙	円筒破片	A
31集10-6	AT5	Hue7.5YR8/3	明茶	円筒(3 条) A	
31集10-7	AT5	Hue2.5YR6/8	橙	円筒(3 条) A	
31集11-10	AT5	Hue10YR7/3	明茶・灰	円筒破片	A
31集14-33	AT5	Hue2.5YR6/4	橙	人物	A
3 集15-11	AT6	Hue5YR5/8	橙	円筒(3 条) A	
3 集17-14	AT7	Hue2.5YR5/8	橙	円筒(3 条) A	
31集11-8	AT7	Hue10YR6/3	こげ茶	円筒(3 条) A	
31集16-65	AT7	Hue2.5YR6/8	橙	人物	A
3 集16-12	AT8	Hue5YR6/1	灰	円筒(3 条) A	
3 集20-45	—	Hue5YR7/2	灰	円筒破片	A
3 集33-188	—	Hue2.5YR6/8	橙	大刀	A
3 集33-190	—	Hue2.5YR6/8	橙	蓋	A
3 集33-191	—	Hue2.5YR6/8	橙	蓋	A
3 集11-2	AT2(生出塚 DE9)	Hue10YR8/4	明茶	円筒(3 条) B	
3 集12-3	AT2(生出塚 DE9)	Hue7.5YR8/6	明茶	円筒(3 条) B	
3 集13-5	AT2(生出塚 DE9)	Hue10YR8/2	明茶	円筒(3 条) B	
3 集13-6	AT2(生出塚 DE9)	Hue10YR8/4	明茶	円筒(3 条) B	
3 集20-46	AT2(生出塚 DE9)	Hue5YR5/6	赤	円筒破片	B
3 集23-77	AT2(生出塚 DE9)	Hue5YR7/4	橙・灰	円筒破片	B
3 集23-78	AT2(生出塚 DE9)	Hue5YR7/4	橙・灰	円筒破片	B
3 集23-83	AT2(生出塚 DE9)	Hue5YR7/4	橙・灰	円筒破片	B
3 集29-132	AT2(生出塚 DE9)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	B
3 集14-7	AT3'	Hue10YR8/3	明茶	円筒(3 条) B	
3 集15-9	AT3	Hue10YR8/4	明茶	円筒(3 条) B	
3 集15-10	AT3	Hue10YR8/4	明茶	円筒(3 条) B	
3 集17-16	AT3'	Hue7.5YR7/4	明茶	円筒破片	B
3 集20-47	AT3'	Hue5YR7/2	灰	円筒破片	B
3 集22-76	AT3'	Hue2.5YR6/1	灰	円筒破片	B
3 集23-85	AT3'	Hue7.5YR7/4	明茶・灰	円筒破片	B
3 集23-86	AT3	Hue7.5YR7/4	明茶・灰	円筒破片	B
3 集23-88	AT3	Hue7.5YR7/4	明茶・灰	円筒破片	B
31集9-2	AT3'	Hue7.5YR8/4	明茶	円筒(3 条) B	
31集12-13	AT3'	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	B
3 集11-1	AT4	Hue10YR6/1	灰	円筒(3 条) B	
3 集12-4	AT4	Hue10YR6/1	灰	円筒(3 条) B	
3 集14-8	AT4	Hue5YR7/6	橙	円筒(3 条) B	
3 集29-127	AT4	Hue5YR6/6	橙	円筒破片	B
3 集29-129	AT4	Hue5YR6/6	橙	円筒破片	B
31集12-16	AT4	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	B
3 集19-24	—	Hue5YR6/6	橙	円筒破片	B?
3 集33-187	—	Hue10YR5/8	赤	大刀	B
3 集33-189	—	Hue2.5YR5/8	赤	大刀	B
31集15-64	—	Hue2.5YR5/8	赤	人物	B
31集16-71	—	Hue2.5YR5/8	赤	馬	B
31集16-75	—	Hue2.5YR5/8	赤	馬	B

【将軍山古墳】

個体番号	刷毛目	土色帖	色調	器種・条数	群別
確認9-r1	SG5	Hue2.5YR5/8	橙	円筒(3 条) A	
確認9-r2	SG5	Hue10YR5/8	赤	円筒(3 条) A	
確認11-r1	SG5	Hue5YR6/6	橙	円筒(3 条) A	
確認11-r2	SG5	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(3 条) A	
確認11-r5	SG5	Hue10YR8/3	明茶	円筒(3 条) A	
確認11-r7	SG5'	Hue5YR7/8	橙	円筒(3 条) A	
確認34-14	SG5	Hue5YR7/8	橙	円筒(3 条) A	
確認34-15	SG5'	Hue5YR7/8	橙	円筒(3 条) A	
確認35-16	SG5	Hue2.5YR7/6	橙	円筒(3 条) A	
確認35-17	SG5'	Hue2.5YR6/8	橙	円筒(3 条) A	
確認35-18	SG5'	Hue2.5YR6/8	橙	円筒(3 条) A	
確認35-19	SG5	Hue2.5YR6/8	橙	円筒(3 条) A	

確認36-22	SG5'	Hue2.5YR6/8	橙	円筒(3 条) A	
確認36-23	SG5'	Hue5YR7/8	橙	円筒(3 条) A	
確認36-24	SG5	Hue2.5YR4/8	赤	円筒(3 条) A	
確認37-25	SG5'	Hue2.5YR5/8	橙	円筒(3 条) A	
確認37-26	SG5/SG5'	Hue5YR6/8	橙	円筒(3 条) A	
確認37-27	SG5	Hue2.5YR5/8	橙	円筒(3 条) A	
確認37-28	SG5	Hue2.5YR5/8	橙	円筒(3 条) A	
確認41-42	SG5	Hue2.5YR7/6	橙	朝顔	A
確認41-43	SG5	Hue5YR6/8	橙	朝顔	A
確認41-45	SG5	Hue2.5YR5/8	橙	朝顔	A
確認38-31	SG6	Hue2.5YR6/8	橙	円筒(4 条) A	
確認41-41	—	Hue10YR8/3	明茶	朝顔	A
確認42-43-1	SG1	Hue5YR7/6	橙	穀	B
確認39-36	SG2	Hue5YR5/6	橙	円筒(4 条) B	
確認44-11	SG2	Hue2.5YR6/6	橙	穀	B
確認45-31	SG2	Hue5YR6/6	橙	盾持人	B
確認39-33	SG7	Hue7.5YR8/6	明茶	円筒(4 条) B	
確認39-34	SG7?	Hue5YR6/8	橙	円筒(4 条) B	
確認39-35	SG7	Hue10YR8/4	明茶	円筒(4 条) B	
確認40-37	SG7'	Hue5YR6/8	橙	円筒(4 条) B	
確認44-10	SG9	Hue5YR7/6	橙	穀	B
確認38-32	SG10	Hue7.5YR8/4	明茶	円筒(4 条) B	
確認38-30	—	Hue5YR7/8	橙	円筒(4 条) B	
確認40-38	ナデ	Hue5YR7/6	明橙	円筒(4 条) B	
確認38-39	ナデ	Hue5YR8/4	明茶	円筒(4 条) B	
確認40-40	ナデ	Hue5YR7/6	橙	円筒(4 条) B	
確認32-1	SG3(生出塚 DE9)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4 条) C	
確認32-2	SG3(生出塚 DE9)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4 条) C	
確認32-3	SG3(生出塚 DE9)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4 条) C	
確認33-5	SG3(生出塚 DE9)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4 条) C	
確認33-6	SG3(生出塚 DE9)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4 条) C	
確認33-7	SG3(生出塚 DE9)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4 条) C	
確認33-8	SG3(生出塚 DE9)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4 条) C	
確認35-20	SG3(生出塚 DE9)	Hue5YR6/8	橙	円筒(4 条) C	
確認33-9	SG4(生出塚 DE27)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4 条) C	
確認33-10	SG4(生出塚 DE27)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4 条) C	
確認33-11	SG4(生出塚 DE27)	Hue2.5YR6/8	赤	円筒(4 条) C	
確認34-12	SG4(生出塚 DE27)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4 条) C	
確認34-13	SG4(生出塚 DE27)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4 条) C	

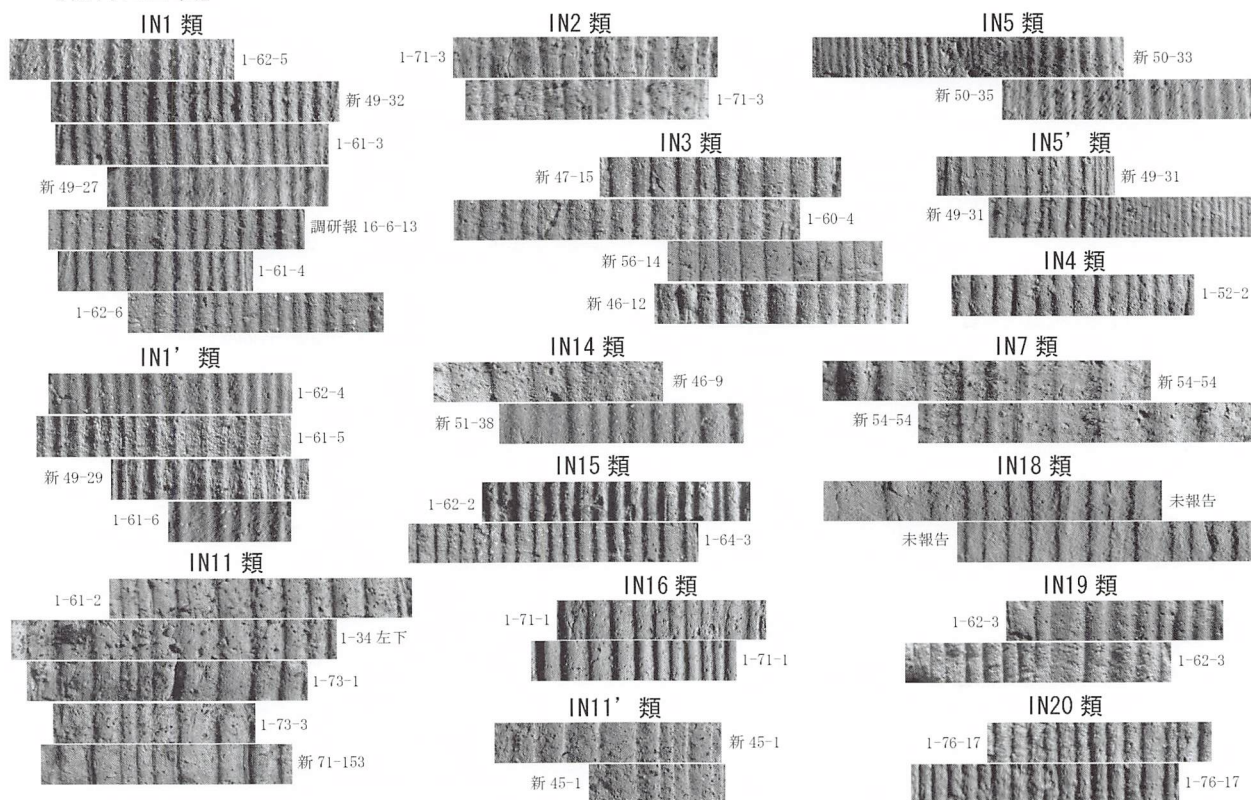
【鉄砲山古墳】

個体番号	刷毛目	土色帖	色調	器種・条数	群別
2 集13-50	TP1(生出塚 DE16)	Hue7.5YR7/6	明茶	円筒破片	A
2 集16-1	TP1(生出塚 DE16)	Hue10YR6/1	灰	大型円筒	A
2 集10-1	TP2	Hue2.5YR6/8	橙	大型円筒	A
2 集11-17	TP3(生出塚 DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2 集11-19	TP3(生出塚 DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2 集12-24	TP3(生出塚 DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2 集12-36	TP3(生出塚 DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2 集13-53	TP3(生出塚 DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2 集14-68	TP3(生出塚 DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	大型円筒	A
2 集14-70	TP3(生出塚 DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2 集14-75	TP3(生出塚 DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2 集15-77	TP3(生出塚 DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2 集15-81	TP3(生出塚 DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2 集19-71	TP3(生出塚 DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2 集19-73	TP3(生出塚 DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2 集20-103	TP3(生出塚 DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2 集20-109	TP3(生出塚 DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2 集11-21	TP4'(生出塚 DE8')	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2 集15-79	TP4'(生出塚 DE8')	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2 集12-28	TP5(生出塚 DE31)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2 集15-86	TP5(生出塚 DE31)	Hue7.5YR7/6	明茶	円筒破片	A
2 集19-58	TP5(生出塚 DE31)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2 集19-61	TP5(生出塚 DE31)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2 集21-113	TP5(生出塚 DE31)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2 集21-117	TP5(生出塚 DE31)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2 集22-127	TP5(生出塚 DE31)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2 集22-134	TP5(生出塚 DE31)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2 集22-135	TP5(生出塚 DE31)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2 集12-25	TP6(生出塚 DE13)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2 集22-125	TP7(生出塚 DE44)	Hue7.5YR7/2	灰	円筒破片	A

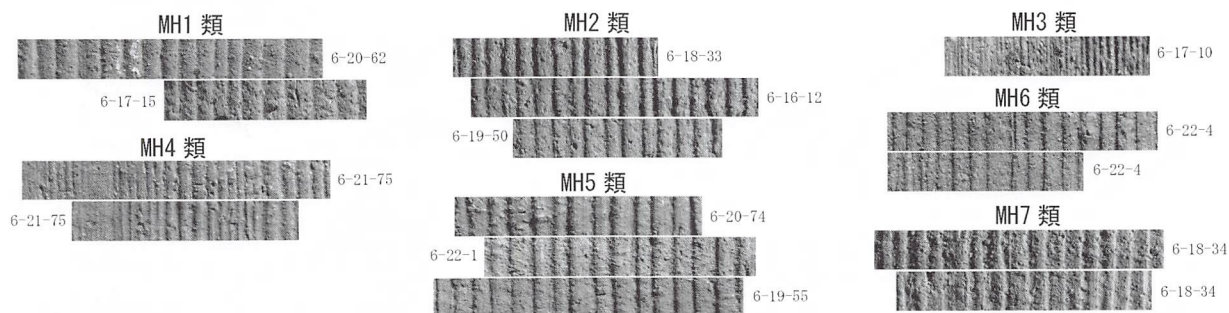
【中の山古墳】

個体番号	刷毛目	土色帖	色調	器種・条数	群別
7 集52-9	NK1/NK1'(末野 A/A')	Hue10BG5/1	青灰	須恵質埴輪壺	A
7 集53-10	NK1/NK1'(末野 A/A')	Hue10BG5/1	青灰	須恵質埴輪壺	A
7 集53-11	NK1/NK1'(末野 A/A')	Hue10BG5/1	青灰	須恵質埴輪壺	A
7 集54-12	NK1/NK1'(末野 A/A')	Hue10BG5/1	青灰	須恵質埴輪壺	A
7 集54-13	NK1/NK1'(末野 A/A')	Hue10BG5/1	青灰	須恵質埴輪壺	A
7 集55-14	NK1/NK1'(末野 A/A')	Hue10BG5/1	青灰	須恵質埴輪壺	A
7 集55-15	NK1/NK1'(末野 A/A')	Hue10BG5/1	青灰	須恵質埴輪壺	A
7 集56-16	NK1/NK1'(末野 A/A')	Hue10BG5/1	青灰	須恵質埴輪壺	A
7 集58-40	NK1/NK1'(末野 A/A')	Hue10BG5/1	青灰	須恵質埴輪壺	A
7 集51-3	—	Hue10BG5/1	青灰	須恵質埴輪壺	A
7 集59-43	—	Hue10YR6/6	明黄	須恵質埴輪壺	B
7 集59-44	—	Hue10YR6/6	明黄	須恵質埴輪壺	B
7 集60-46	—	Hue10YR6/6	明黄	須恵質埴輪壺	B
7 集60-47	—	Hue2.5YR7/2	明赤灰	須恵質埴輪壺	B
7 集60-48	—	Hue2.5YR6/4	橙灰	須恵質埴輪壺	B
7 集61-56	NK2	Hue5B3/1	暗青灰	須恵質埴輪壺	C

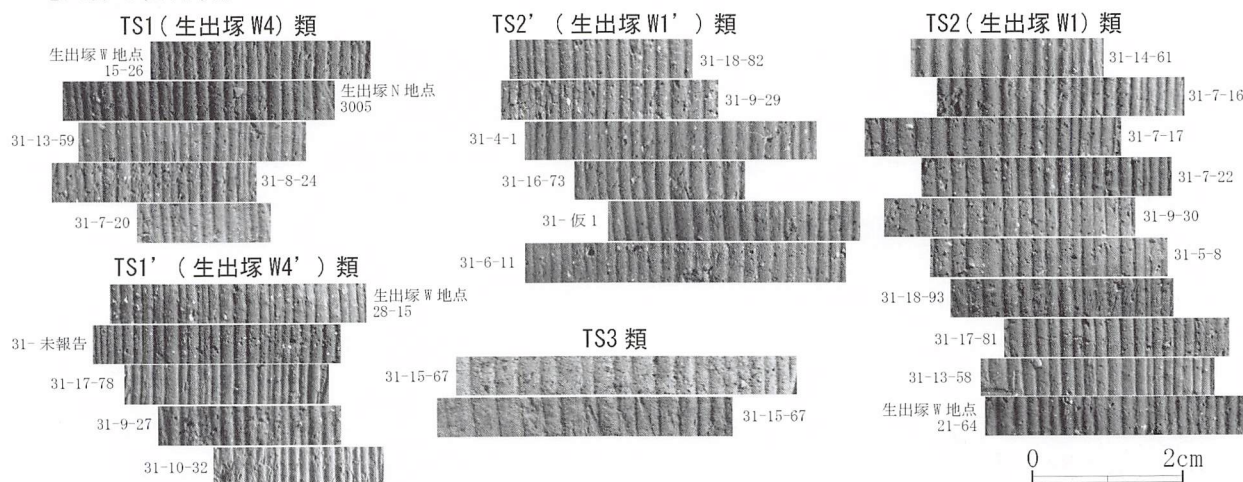
【稲荷山古墳】



【丸墓山古墳】



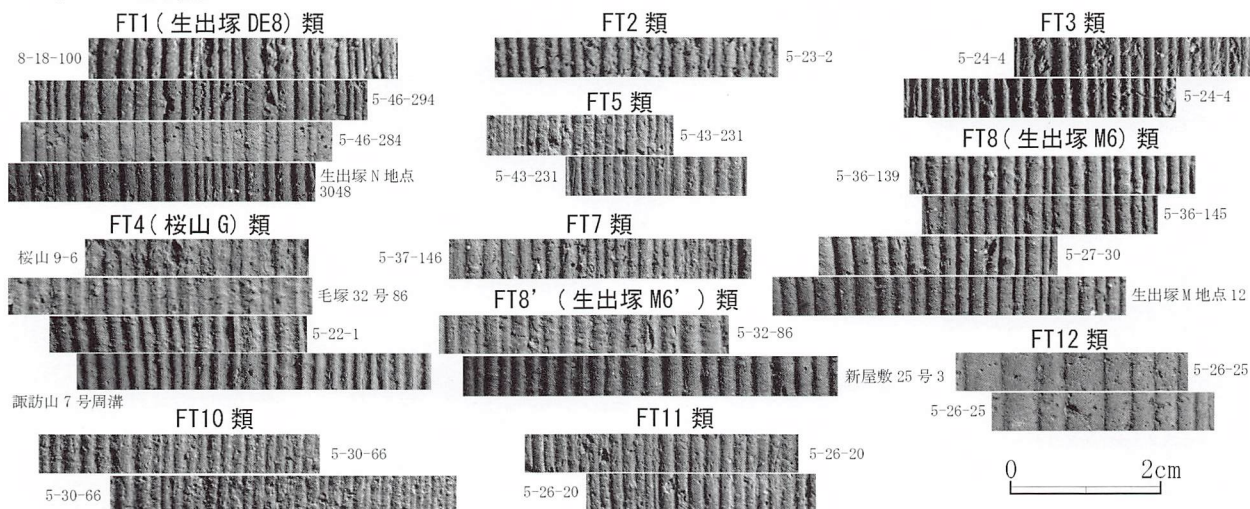
【天祥寺裏古墳】



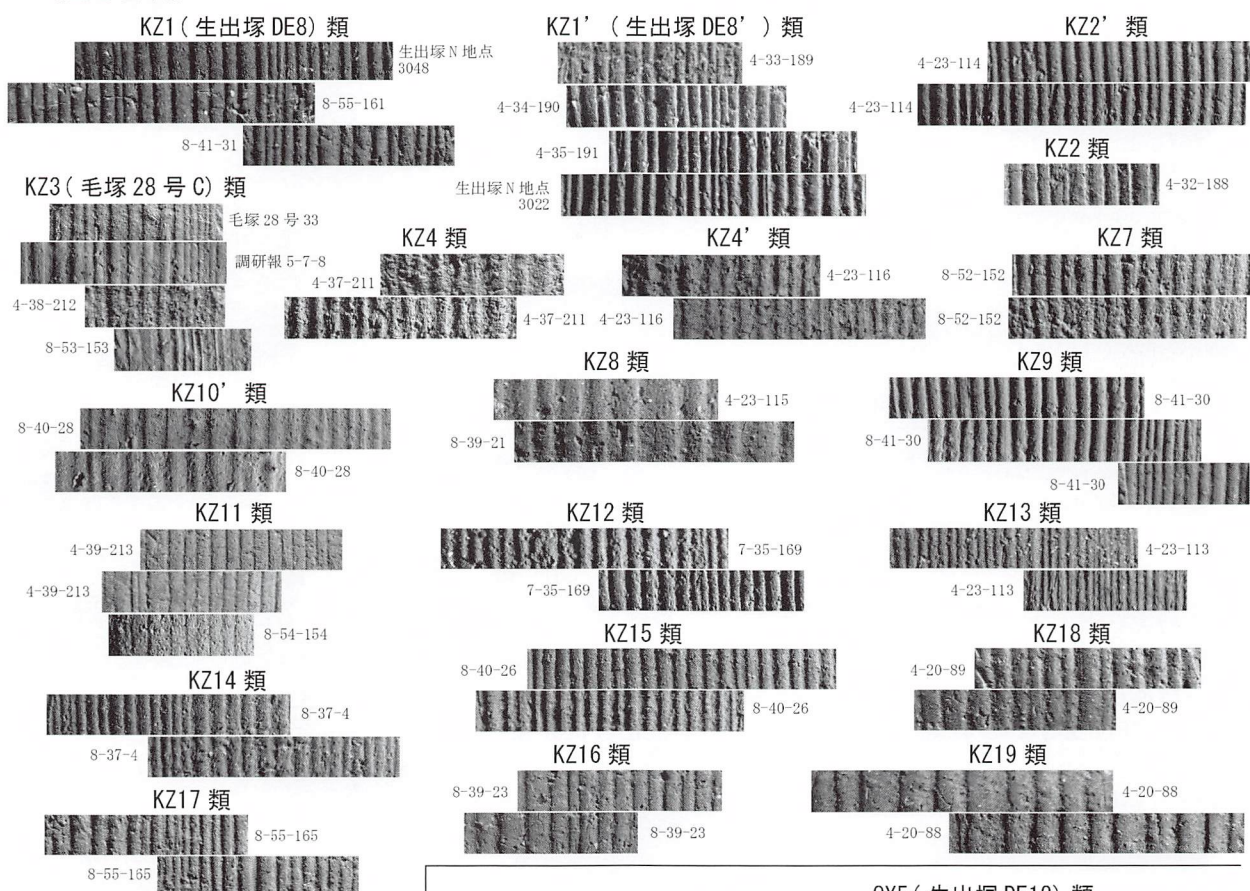
0 2cm

第 1 図 埼玉古墳群出土埴輪の刷毛目データベース①

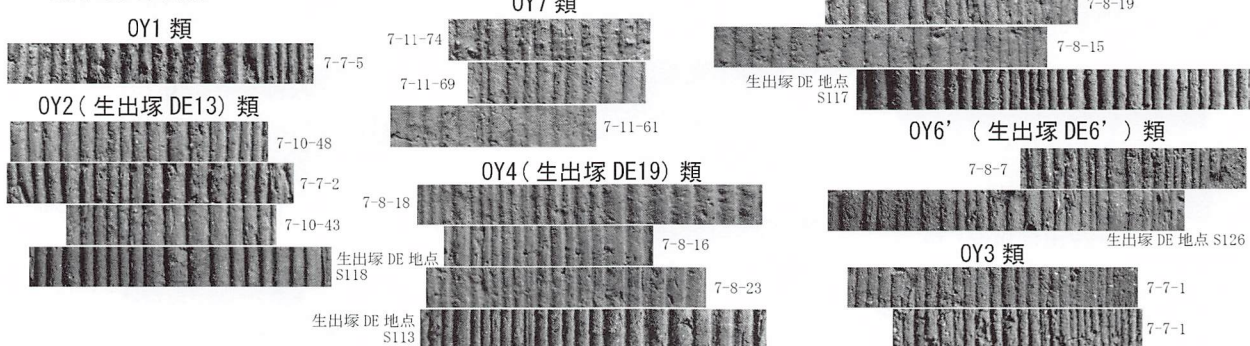
【二子山古墳】



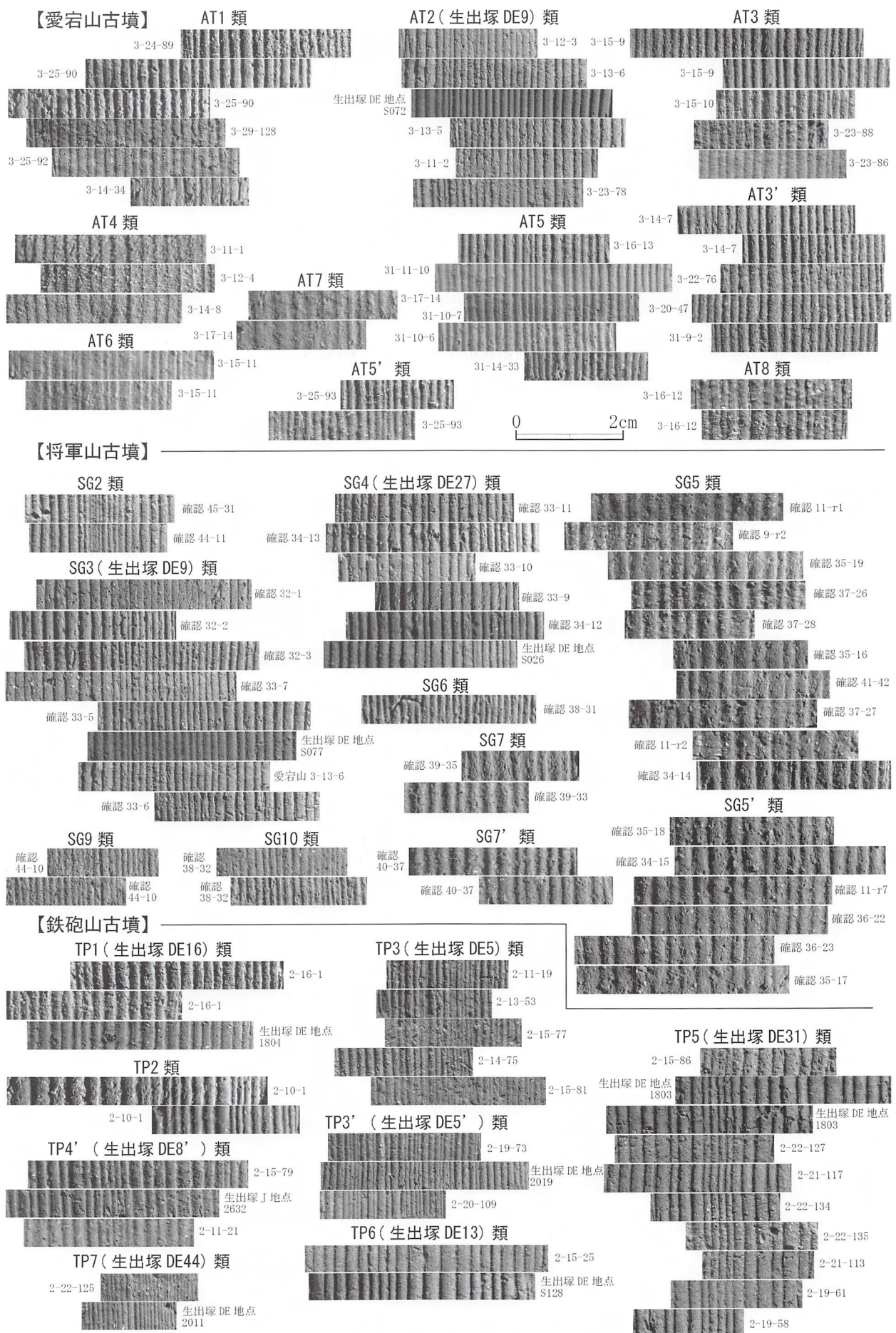
【瓦塚古墳】



【奥の山古墳】

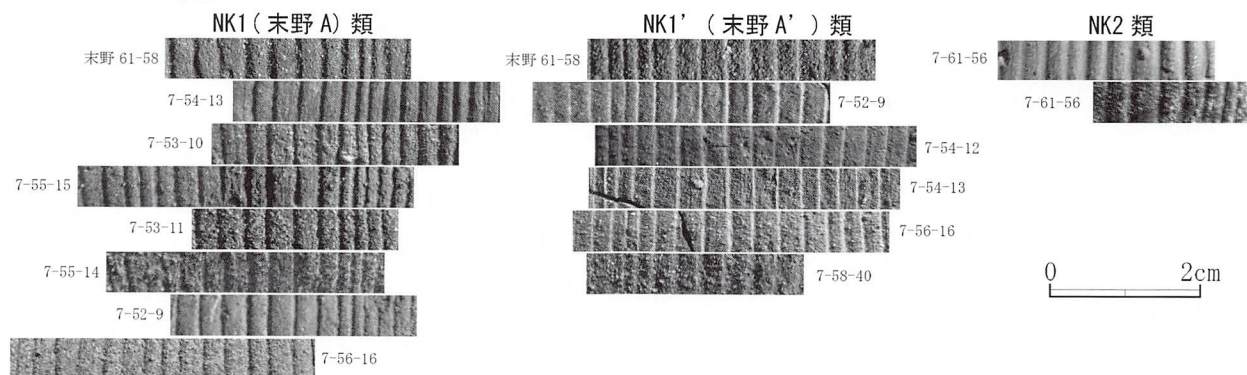


第1図 埼玉古墳群出土埴輪の刷毛目データベース②



第 1 図 埼玉古墳群出土埴輪の刷毛目データベース③

【中の山古墳】



第 1 図 埼玉古墳群出土埴輪の刷毛目データベース④

第 1 表・第 1 図〈基礎データ集成〉凡例一覧

【第 1 表】

※埼玉古墳群の各古墳から出土した埴輪の特徴を整理した。

※個体番号は、各報告書を参照。〈集番号－図版番号－個体番号〉で全個体を記載した。

なお、報告書名に関して省略名を使っているのは以下である。

①「調研報」→『埼玉県立さきたま資料館調査研究報告』

②稲荷山古墳「新」→『武蔵埼玉稲荷山古墳』

③將軍山古墳「確認」→『將軍山古墳 確認調査編』

※刷毛目は、古墳毎に通し番号を付けた。各古墳の略称は、稲荷山 (IN)、丸墓山 (MH)、天祥寺裏 (TS)、二子山 (FT)、瓦塚 (KZ)、奥の山 (OY)、愛宕山 (AT)、將軍山 (SG)、鉄砲山 (TP)、中の山 (NK) である。この略称の後に 1 から番号を振っている。なお、「'」は逆目を示す。

※埼玉古墳群出土埴輪の刷毛目のうち、生出塚窯・桜山窯・末野窯・毛塚古墳群・新屋敷古墳群・諏訪山 7 号周溝など生産遺跡や古墳と合致する刷毛目は、その事実を表中に明記した。なお、生出塚遺跡における刷毛目番号に関しては、以下の論文を踏襲する。

〈城倉正祥2010「生出塚窯産円筒埴輪の編年と生産の諸段階」『考古学雑誌』第94巻第1号〉

※埴輪の色調に関しては、土色帖による客観的な数値を全個体に関して示した。さらに、資料調査の際の感覚的な要素も表現するため、色調部分には肉眼観察による色調分類を示した。

※全個体に関して、器種と円筒の場合は条数を明示した。

※群別に関しては、古墳毎の大分類をアルファベットで示した。アルファベットはあくまで各古墳における群別を示し、埼玉古墳群全体での分類単位ではない。

【第 1 図】

※埼玉古墳群の各古墳から出土した埴輪の刷毛目を整理した。

※刷毛目写真は、デジタルカメラで接写した画像を原寸で示している。ただし、各個体に応じて焼成時の収縮率が異なるため、できるだけ焼成良好な資料を基準として縮尺を微調整している。

※刷毛目番号、及び個体番号は第 1 表に対応する。

※生産遺跡、あるいは他古墳と刷毛目が合致する場合、その合致状況も写真で提示している。その場合、報告書に掲載されている番号を記載した。

※第 1 表中に刷毛目番号があつて第 1 図に写真のない刷毛目に関しては、刷毛目の分類そのものができるが、器表面の状況などから写真による明示が難しいことを示す。

※刷毛目の詳細に関しては、以下の論文を参照。

〈城倉正祥2007「埴輪製作に使用された刷毛目工具」『埴輪研究会誌』第11号〉

られた期間に製作された点が既に判明しているので（城倉2010 a・2010 b）、「刷毛目共通類型」と呼称し図面を重ねて提示する。ちなみに、これら刷毛目共通類型が群別を越えて存在する事例は一例も存在しないので、大別分類の妥当性が確認できる。

次に、各古墳出土埴輪の刷毛目データベースを提示し、群別認識の妥当性を示すと共に、生産地が判明している類型を明示する。なお、刷毛目の分析方法については別に詳述しているので（城倉2009）、それに倣った整理を行う（第1表・第1図凡例参照）。

これらの基礎作業を踏まえた上で、埼玉古墳群出土埴輪全体の大別・細別基準を示し、黄白色系統・橙褐色系統・赤褐色系統それぞれの変遷過程を明らかにする。さらに、各系統相互の派生関係を明らかにし、その時間軸を整理した上で埼玉古墳群の埴輪編年を確立する。

3 各古墳出土埴輪の分類

では、具体的に各古墳出土埴輪の分類成果について示す。なお、各古墳出土埴輪の基礎データについては第1表にまとめ、分類単位の主要な実測図を第2～11図に示した。

3-1 稲荷山古墳（第2図①②）

稲荷山古墳については、若松良一の大分類を修正した分類案を示す。若松は4類に分類するが、ここではA・B・C群に3分類する。

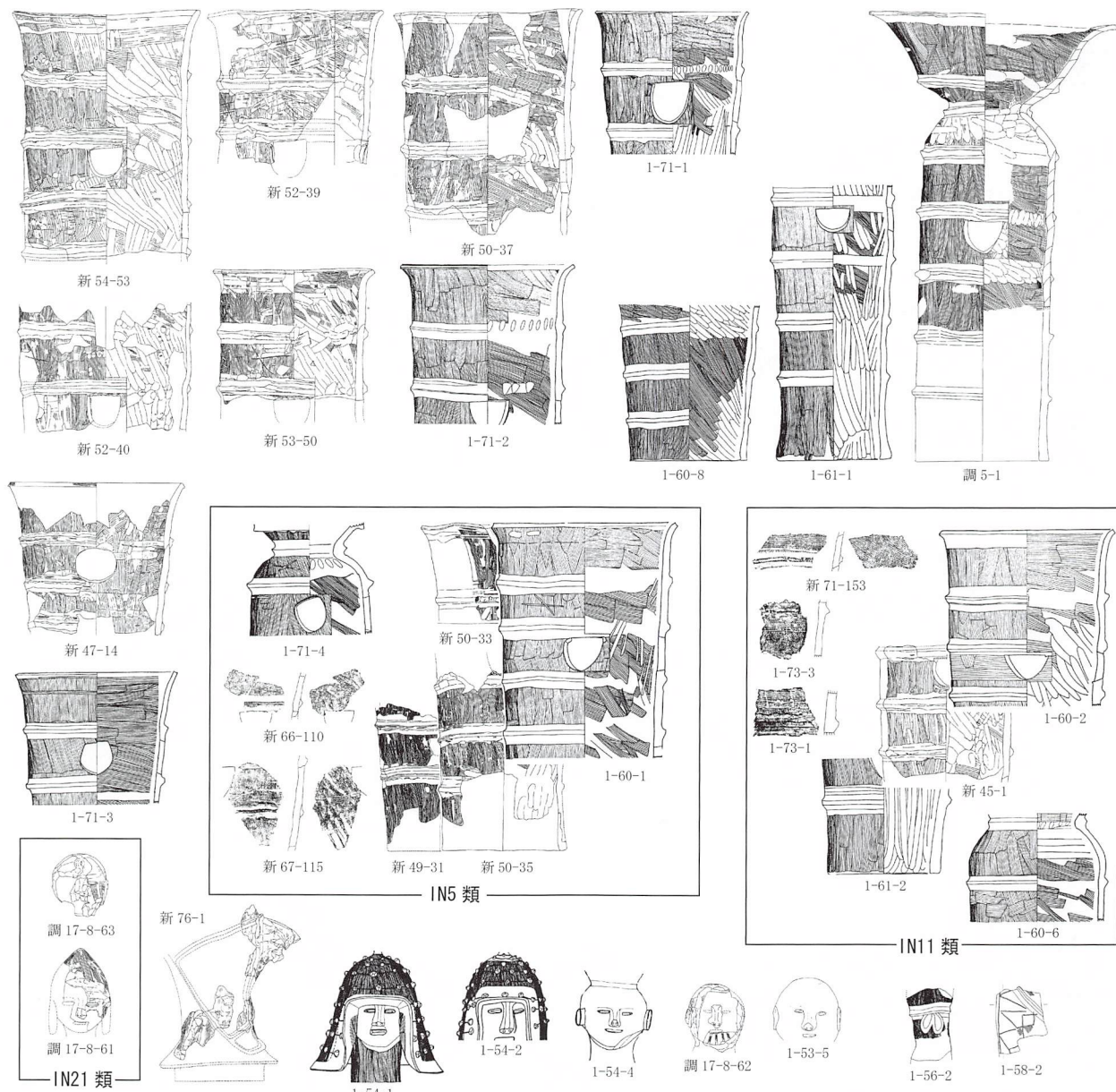
【A群】若松がA類とする一群である。黄白色のなめらかな胎土を特徴とし、軟質で断面が黒色を呈する。客体的なB種ヨコハケ・半円透孔・突帯下側につく板押圧技法・赤彩など共通性の高い埴輪群で識別が容易である。大型円筒はいずれも半円透孔を有する。B種ヨコハケの個体が認められるが、その多くがIN11の刷毛目で調整され、特定類型に集中する点が注目される。極めて限られた工人のみがB種ヨコハケの技法を使用していたと推察される。大型円筒では、最下段と最上2段が非穿孔域になっているようで、5条6段の可能性が高いと考える。なお、新47-14と1-71-3のように、円形透孔の中型品の規格も存在する。形象埴輪では眉庇付冑の武人が特徴的である。

【B群】若松がC・D類とする一群である。若松がC・D類と分けながらも、その生産地をともに「和名窯かその周辺」としているように、若松のC・D類は明確には峻別できないため一括して類型化する。なお、若松がC1・C2類とする円筒については、刷毛目の一致から明らかにC群に分類できる埴輪が含まれているので、本稿のB群と若松のC・D類は明確な対応関係にはない。橙褐色で砂粒の多い胎土を特徴とするが、若干多様な様相を示し、複数生産地の製品を含んでいる可能性が高い。しかし、後述するC群とは異なり円筒の第1段が高く、段間も広めであることが特徴である。透孔はいずれも円形で、口縁部に外面ナナメハケを施す個体が多い。円筒の突帯板押圧技法、朝顔の擬口縁状の作りなど、基本的にはA群と共通する技法が見出せる。

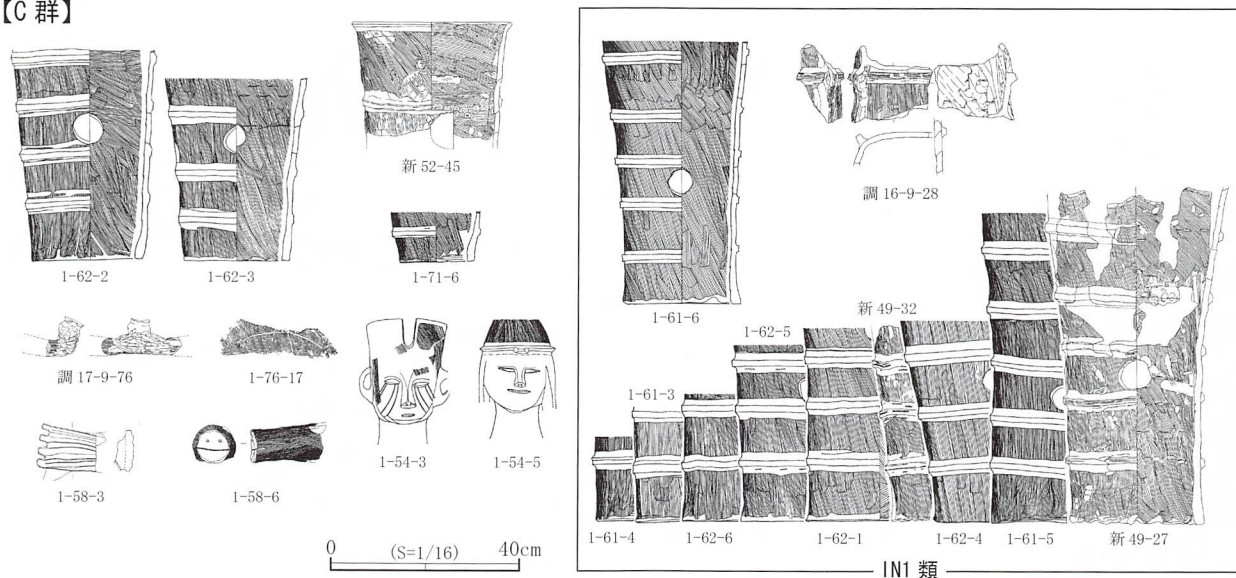
なお、重要なのは1-66-5、1-66-6の個体に見られるような3本突帯の円筒が認められる点である。後述するが、丸墓山C群MH5類にもこのような複数稜の突帯を持つ円筒が認められ、これらは比企の雷電山古墳（埼玉県県史編纂室1986）出土埴輪の系譜を引くものと考えている。そのため、本稿では「雷電山復古型」と仮称する。

形象埴輪は、家・馬・鳥・器財・人物が認められる。特に人物埴輪は、色調・胎土こそ違おうが、A群とよく似た特徴を有する。

【A 群】

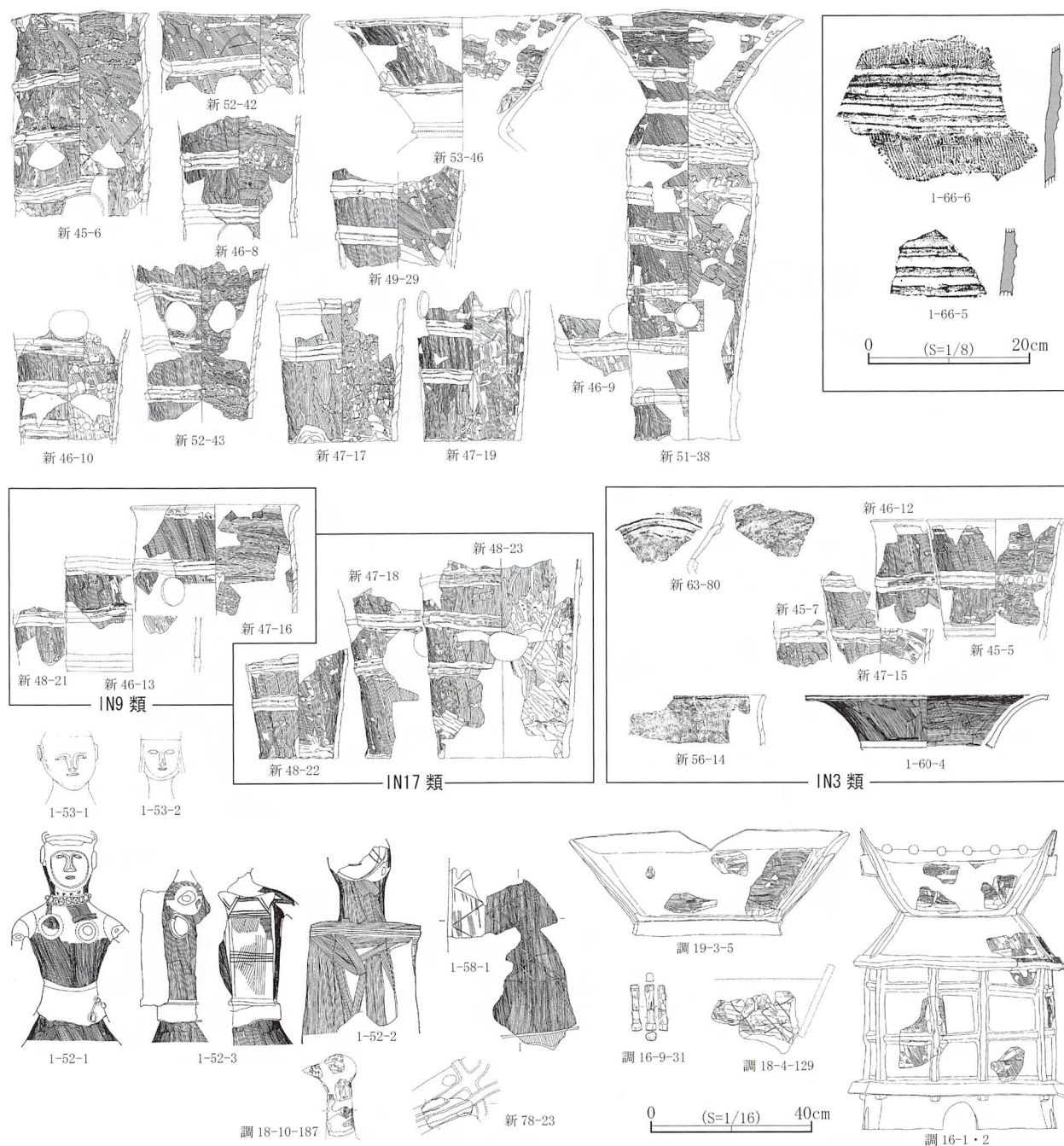


【C 群】



第 2 図 稻荷山古墳出土埴輪の分類①

【B 群】

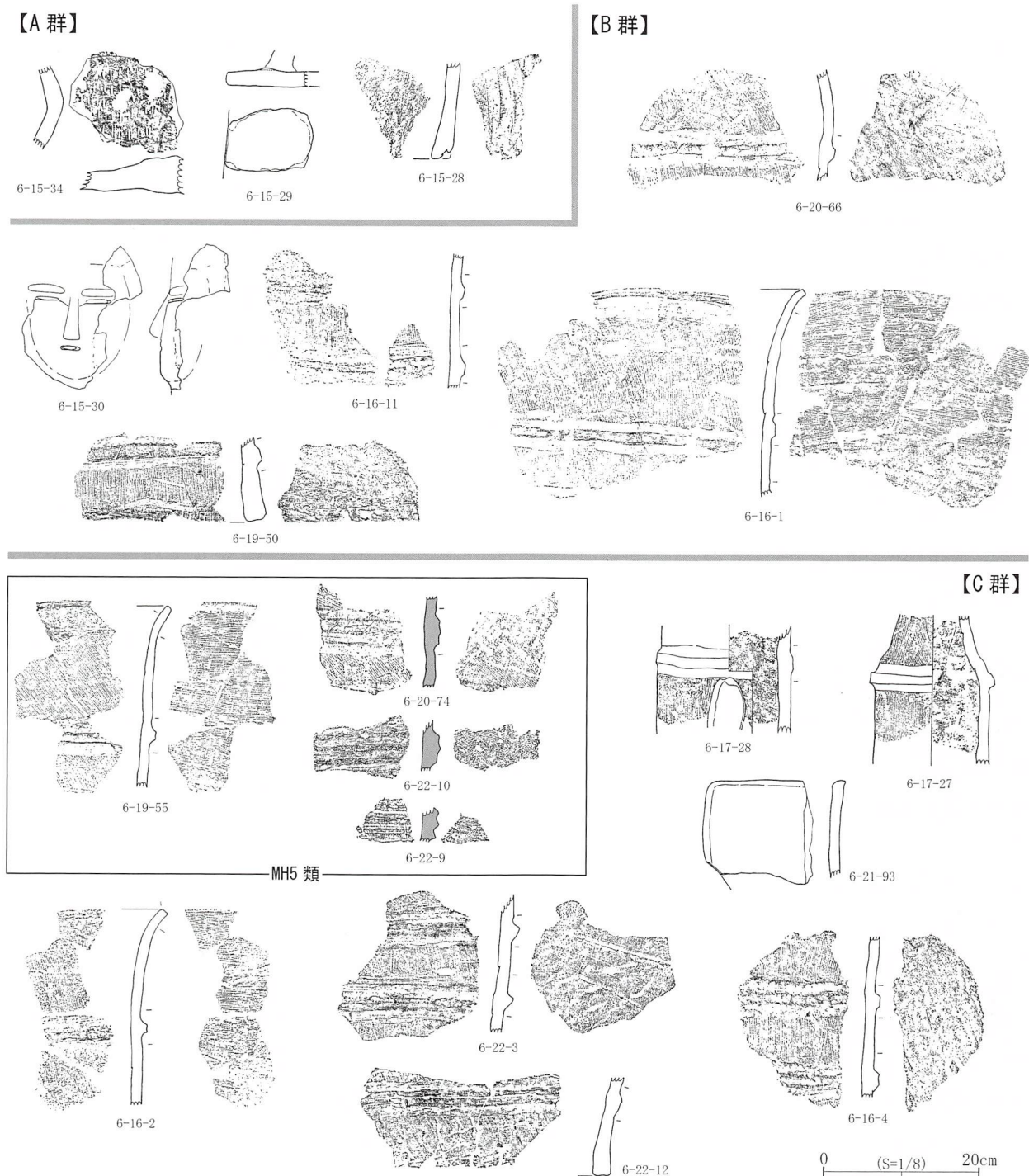


第 2 図 稲荷山古墳出土埴輪の分類②

【C 群】若松が生出塚窯産とする B 類と C 1・C 2 類の一部を含む一群である。若松が B 類と C 類の峻別に苦労しているように、基本的には B 群の中での特徴的な一群を C 群として類型化しているのが実態に近い。赤褐色の砂粒が少ない胎土を特徴とする。円筒はいずれも細身で、最下段及び段間がかなり狭い。5 段目以上に顕著なナメハケを施す個体が多く、突帯も断続ナデ状の歪みをもつ個体が多い。特に同じ刷毛目で調整される IN 1 類は非常に画一的な埴輪群である。

形象埴輪は、家・動物・人物が認められるが、やはり B 群と共通性が高い。

この C 群については、若松が生出塚窯産である可能性を指摘し、生出塚 W 地点 33 号窯出土品との共通性を示唆するが、現状で確認されている生出塚遺跡の窯に同一刷毛目は見出せず、生出塚窯製品と判断はできない。しかし、C 群（若松 B 類）を生出塚窯産とした若松の指摘は重要で、この稲



第3図 丸墓山古墳出土埴輪の分類

荷山C群は、後述する二子山C群FT 1類・FT 8類の大型円筒（生出塚窯産）へと型式的にスムーズに繋がりを有する特徴を持っている点が注目される。すなわち、IN 1類は細身の5条6段構成で、第一段が低く、段間も狭い。さらに、5段目以上にナメハケを多用し、最上段が幅広いななど二子山FT 1類・FT 8類と共通した特徴を持つ。しかしながら、IN 1類は二子山FT 1類・FT 8類に比べて器形が寸胴化しておらず突帯が高いなど前出的で、まさに系譜関係を想定させる特徴を保持する。つまり、稲荷山C群は稲荷山B群の一部から生まれた「生出塚系統の直接の祖形となりうる埴輪群」ということになる。しかし、B群の中の特徴的な一群をC群として認識したように、B群・C群両者の型式的距離は近い。さらに、生出塚I期に位置付けられる生出塚W地点でもIN 1類の刷毛目や同じ特徴をもった大型円筒を確認できないことからすれば(城倉2010a)、稲荷山古墳の段階では生

出塚は開窯していない可能性が高い。A群とB群を主体とする稲荷山古墳の埴輪生産の段階で、B群の一部に生出塚系統の直接の祖形となりうるC群が生まれていた状況と理解するのが妥当だろう。

3-2 丸墓山古墳（第3図）

丸墓山古墳に関しては、現在までの発掘で出土した埴輪は破片資料に限られており、全形が分かる資料は存在しない。しかし、破片資料の分析でも、A・B・C群の3分類が可能である。

【A群】黄白色の胎土を特徴とする。確認できる個体数は限られているが、稲荷山A群と酷似する特徴を有する。

【B群】橙褐色の胎土を特徴とする。稲荷山B群と酷似する。

【C群】赤褐色の砂粒が少ない胎土を特徴とする。破片資料のみだが、最下段と段間が非常に狭い一方で、最上段が長く設定されている。これらの破片資料から推定される円筒の形態上の特徴は、まさに稲荷山C群IN1類と二子山C群FT1類・FT8類の間の過渡的様相を呈している。なお、稲荷山古墳における状況と同じく丸墓山C群は丸墓山B群と特徴がよく似ている。

ところで、C群には6-20-74、6-22-9、6-22-10のように3稜の突帯を持つ「雷電山復古型」が存在している。破片資料のためあまり積極的に評価されてこなかった資料だが、6-19-55の普通円筒と同じMH5の刷毛目で調整されるなど、普通円筒と一連で製作された埴輪だと考えられる。稲荷山古墳と丸墓山古墳においてのみ、この「雷電山復古型」が存在している点は重要である。橙褐色系統の埴輪が比企地方の窯で生産された事実を示すものだろう。

3-3 天祥寺裏古墳（第4図）

天祥寺裏古墳出土埴輪は、A・B・C群の3分類が可能である。

【A群】赤褐色で砂粒の少ない胎土を特徴とする。焼成が良好で灰褐色に変色する個体も多くある。TS1類・TS2類ともに4条5段の円筒埴輪で、最下段と段間が狭く、最上段が広く設定されている。鳥・馬・人物も確認できる。A群に関しては、生出塚遺跡南支台W地点32・33号窯で焼成された事実が判明している。生出塚編年のI期後半に位置付けられる（城倉2010a）。

【B群】橙褐色で砂粒が非常に多い胎土を特徴とする。現状で確認できるのは、31-10-31の1個体のみなので、混入の可能性もある。

【C群】明茶褐色を呈する特異な一群である。胎土に径3～5mmの砂粒を大量に含み、黒色の小石も混じる。北武蔵では全く認められない胎土で、帽子と盾の器財のみが確認できる。刷毛目もA・B群と一致しない。埼玉古墳群中唯一の群馬系の埴輪と考える。

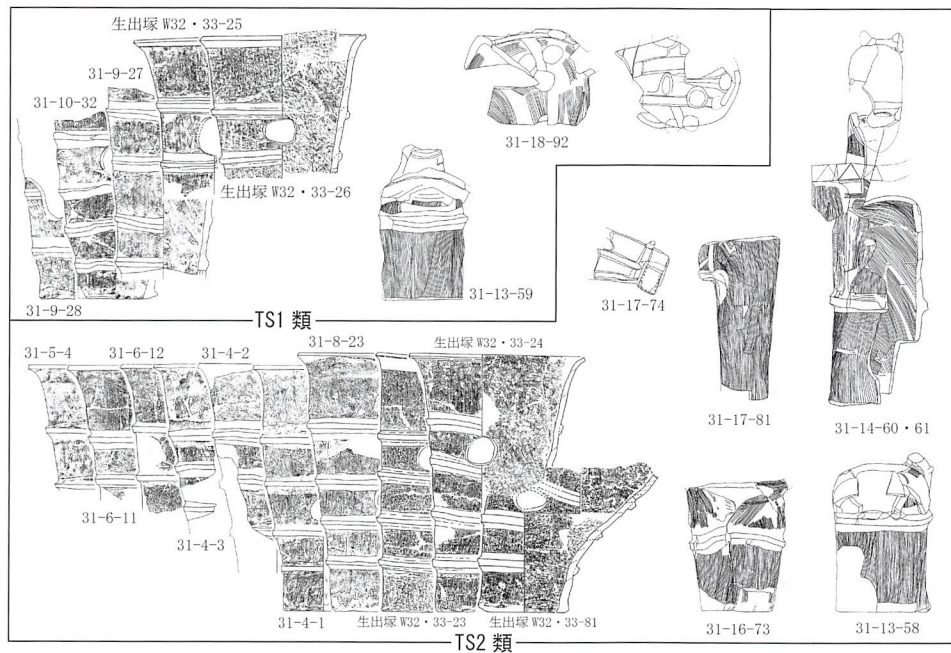
3-4 二子山古墳（第5図）

二子山古墳出土埴輪は、A・B・C群の3分類が可能である。

【A群】黄白色のなめらかな胎土を特徴とする。現状で確認できるのは破片数点だが、稲荷山A群・丸墓山A群と酷似する埴輪群である。

【B群】橙褐色で砂粒が比較的多い胎土を特徴とする。発色がピンク色に近い個体が多い。全形を把握できる資料としてFT4類がある。FT4類は段間が均等に設定される大型円筒で、方形透孔が

【A 群】



【B 群】



31-10-31

【C 群】



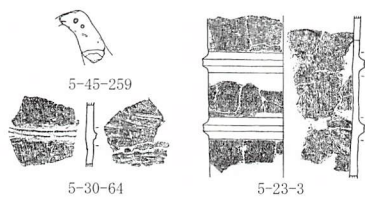
31-15-67

31-16-68

0 (S=1/16) 40cm

第4図 天祥寺裏古墳出土埴輪の分類

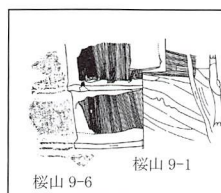
【A 群】



【B 群】

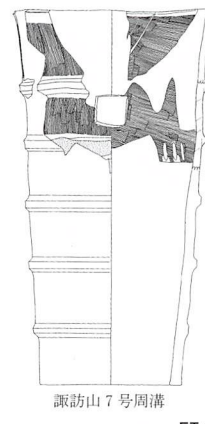


5-33-92

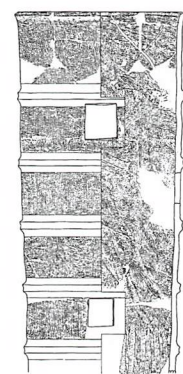


桜山 9-6

桜山 9-1



諏訪山7号周溝



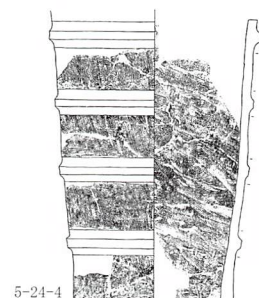
5-22-1

- FT4 類

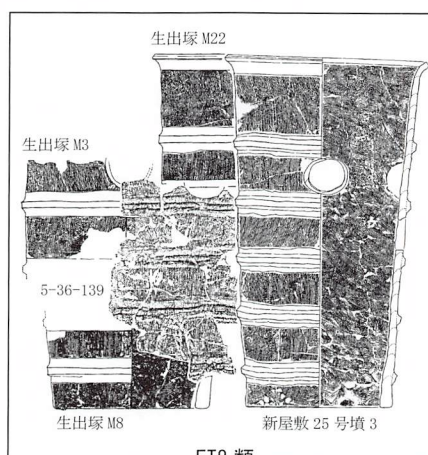
【C 群】



5-30-68



5-24-4



生出塚 M22

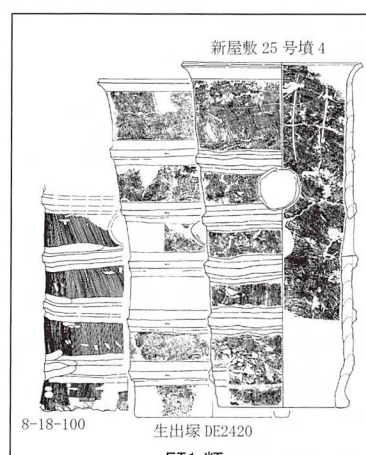
生出塚 M3

5-36-139

生出塚 M8

新屋敷 25 号墳 3

- FT8 類



新屋敷 25 号墳 4

8-18-100

生出塚 DE2420

- FT1 類

第5図 二子山古墳出土埴輪の分類

特徴的である。FT 4 類の刷毛目に関しては、桜山遺跡 9 号窯の焼台として使用された大型円筒、さらに諏訪山 7 号周溝・毛塚 32 号墳出土円筒と一致することが判明しており、「プレ桜山」に属する(城倉 2010 b)。同じく、B 群では 5-23-2 のように最上段が著しく長い大型円筒も確認できるが、最上段に「プレ桜山」の特徴である波状文も見出せる。つまり、B 群はいずれも比企の桜山周辺で生産された埴輪群であることが明白である。

【C 群】赤褐色の砂粒の少ない胎土を特徴とする。前述したように稲荷山 C 群 IN 1 類、及び丸墓山 C 群の系譜を引く FT 1 類・FT 8 類が注目される。5 条 6 段構成の寸胴な大型円筒で、第 1 段が著しく短い。この FT 1 類・FT 8 類は生出塚遺跡 N 地点 30 号窯、及び M 地点 27・28 号窯で焼成された埴輪で、この二子山 C 群の生産を契機として生出塚遺跡では北支台の大規模な生産活動が始まる。生出塚 II 期の開始である(城倉 2010 a)。さらに、後述する瓦塚 C 群 KZ 1 類の大型円筒は、二子山 FT 1 類と同一の刷毛目であり、FT 1 類の第 1 突帯を省略した 4 条 5 段の規格である。すなわち、二子山 C 群・瓦塚 C 群が生出塚遺跡における大規模生産の開始の大きな画期となるのである。

3-5 瓦塚古墳(第 6 図)

瓦塚古墳出土埴輪は、A・B・C 群の 3 分類が可能である。

【A 群】黄白色の滑らかな胎土を特徴とする。しかし、稲荷山 A 群・丸墓山 A 群・二子山 A 群とは異なり、白色が弱くクリーム色に近い色調が特徴である。円筒は段間が均等に設定される。形象は、全身像を含む人物・馬・鳥・器財が確認できる。瓦塚 A 群は黄白色系統に属しながらも、かなり後出的な様相を呈する。さらに、人物埴輪の特徴をみると B 群ともかなり型式的距離が近いことが伺われる。

【B 群】橙褐色で砂粒の多い胎土を特徴とする。残存度の高い個体も多く、全体像を把握することができる。円筒は 4 条 5 段を基本とし、段間が均等、最上段と最下段が若干長めに設定される。3・4 段目に直交する円形透孔を穿孔する。器形は緩やかに開くものから、若干寸胴気味に立ちあがるものまで存在する。形象は、家・動物・人物が確認できる。なお、KZ 3 類の刷毛目は、桜山窯に至近の毛塚古墳群 28 号墳 C 類と同一の刷毛目であるように、B 群は明らかな「プレ桜山」に属する。二子山 B 群と極めて近い埴輪群と言える。

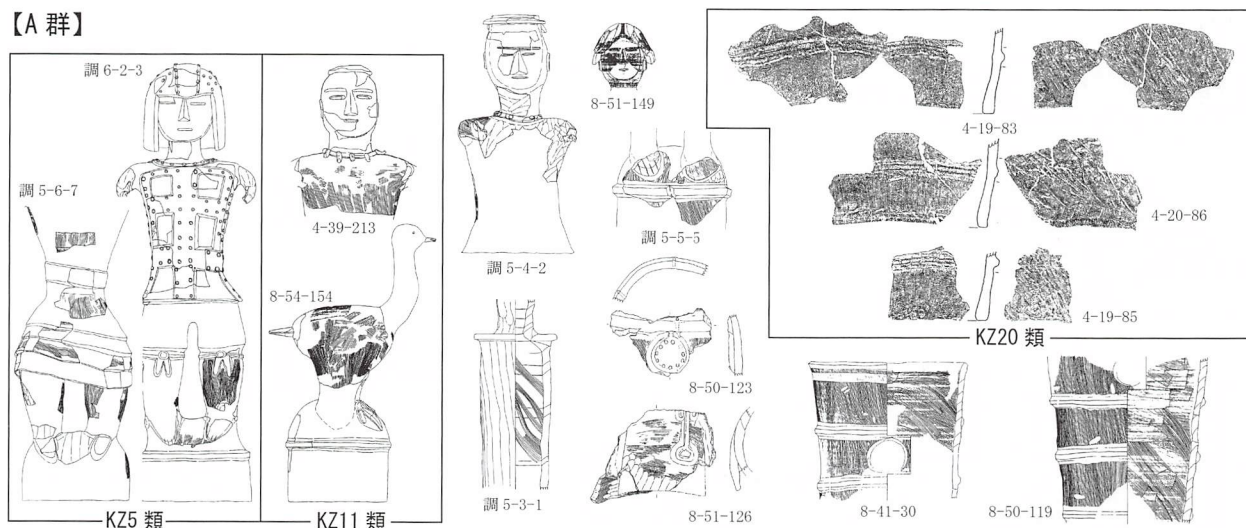
【C 群】赤褐色の砂粒の少ない胎土を特徴とする。前述したように KZ 1 類は二子山 C 群 FT 1 類と同一の刷毛目で、生出塚窯産である点が確定している。瓦塚 C 群の円筒は、二子山 C 群の円筒と器形・調整手法が酷似する。特に、KZ 1 類と FT 1 類は同じ刷毛目で同工品の可能性が高いと考えているが、両古墳の階層差を明示するために円筒の条数を一本減らしていることが注目される。ちなみに瓦塚 KZ 1 類は、新屋敷古墳群の埴輪棺 228-2 にも同じ刷毛目が認められる。形象埴輪は、馬・家・器財・人物が確認できるが、いずれも円筒と同じく濃い赤色で、生出塚産埴輪の特徴が明らかである。

3-6 奥の山古墳(第 7 図)

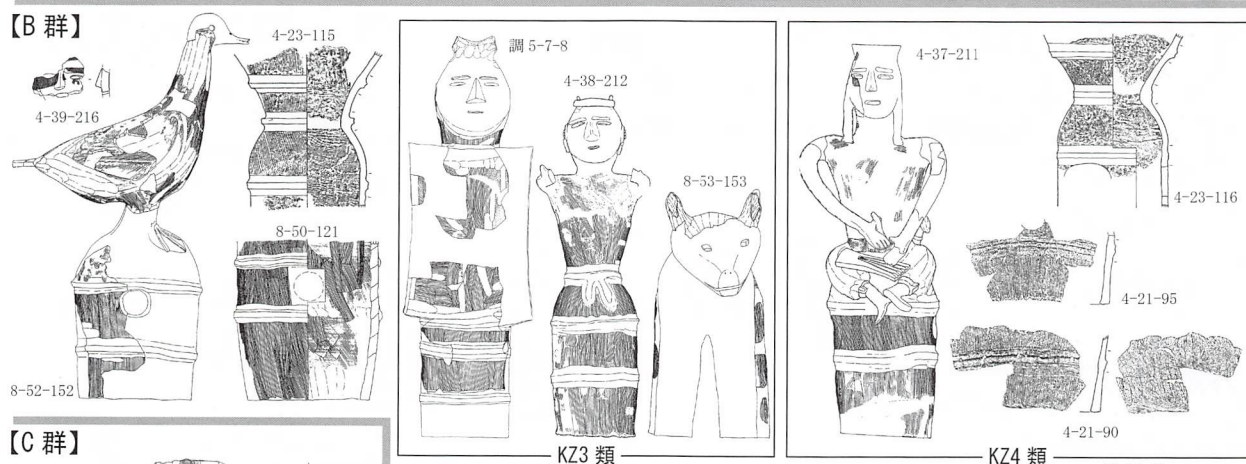
奥の山古墳出土埴輪で報告されている個体は、いずれも破片資料である。近年の発掘調査によって良好な資料が出土しているようだが、ここでは破片資料をもとに A・B 群に分類する。

【A 群】橙褐色の色調を特徴とする。二子山 B 群・瓦塚 B 群とよく似た胎土で、ピンク色に近い発

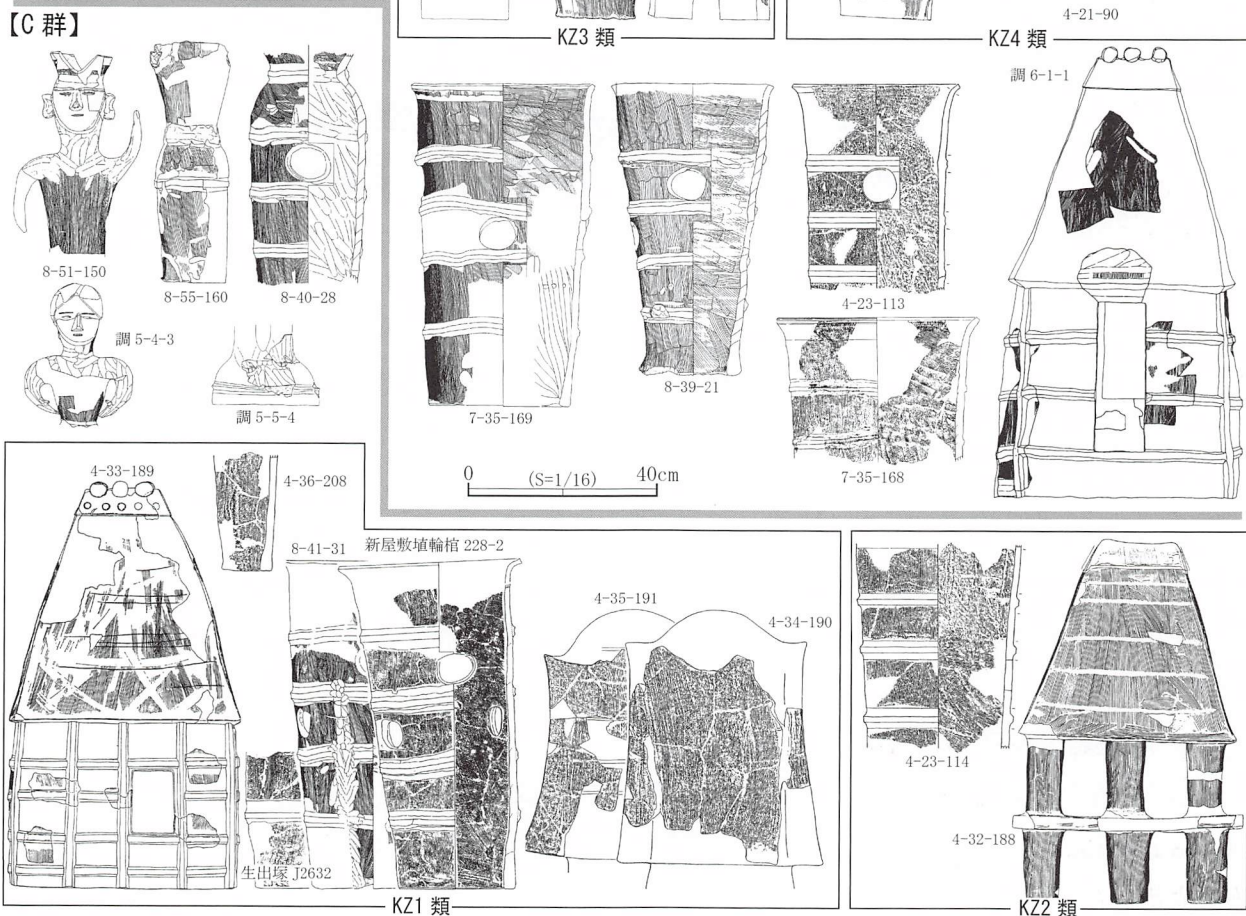
【A 群】



【B 群】

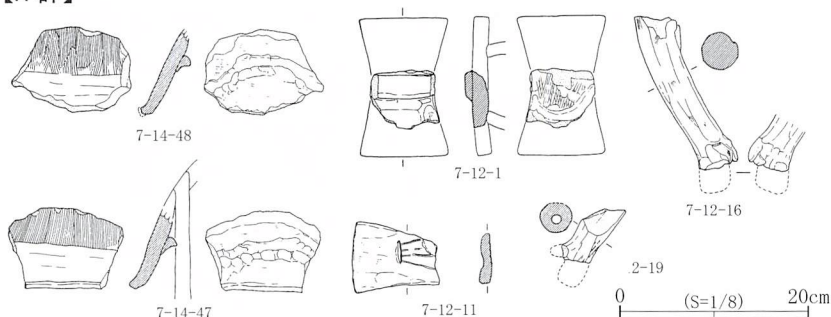


【C 群】

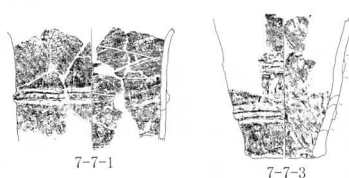
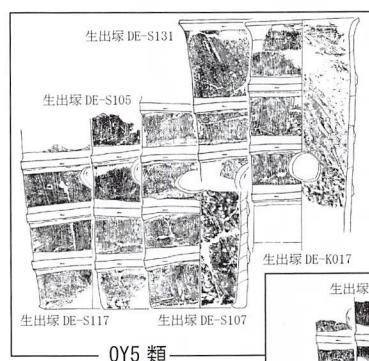
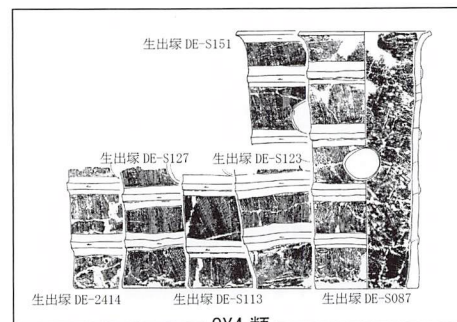
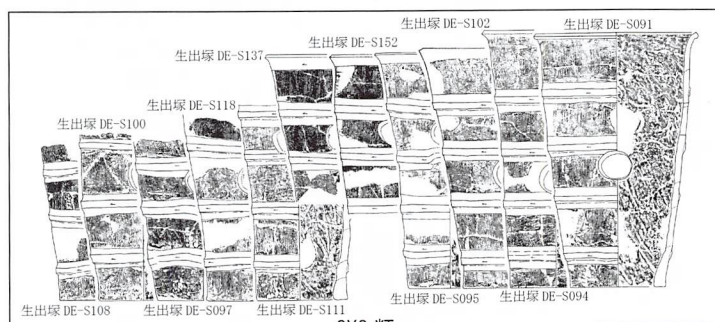
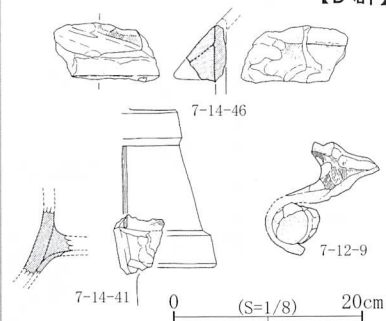


第 6 図 瓦塚古墳出土埴輪の分類

【A群】



【B群】



第7図 奥の山古墳出土埴輪の分類

色の個体が多い。家・人物など形象破片が主体を占める。

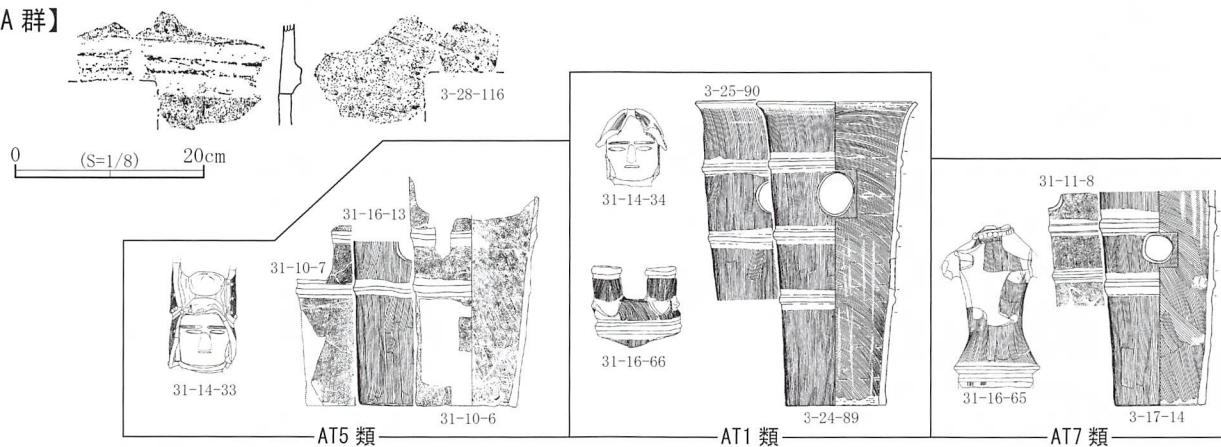
【B群】赤褐色の砂粒の少ない胎土を特徴とする。奥の山B群はいずれも小破片で様相が分かりにくい、生出塚 DE 地点出土品の刷毛目と一致するため、生出塚窯産であることが確定している。さらに、生出塚 DE 地点を中心に残りの良い個体が多く確認されており、全体像の把握が可能である。図示したように OY 2 類・OY 4 類・OY 5 類・OY 6 類とほぼ円筒の様相が判明している。いずれも第1段が低い4条5段で、天祥寺裏A群 TS 1 類・TS 2 類からのスムーズな変遷が追える資料である。生出塚編年のⅡ期前半、二子山古墳・瓦塚古墳の直後に位置付けられる埴輪群である。

3-7 愛宕山古墳 (第8図)

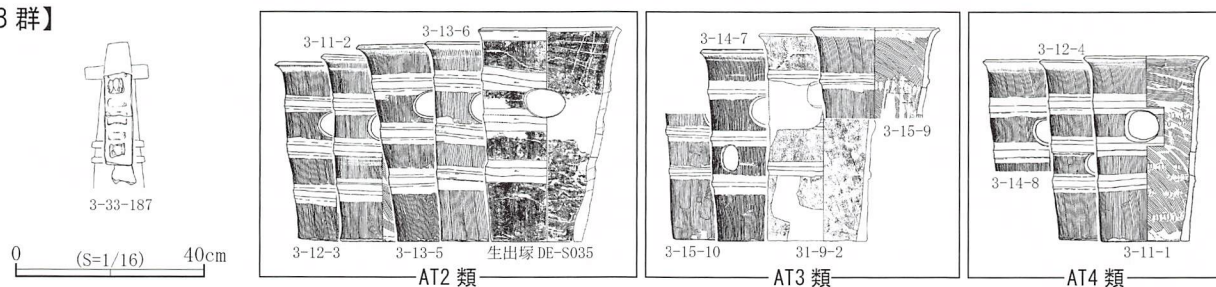
愛宕山古墳出土埴輪は、A・B群の2分類が可能である。

【A群】橙褐色で著しく砂粒の多い胎土を特徴とする。意図的に胎土に多量の砂粒を混入しているものと思われ、後述する將軍山A群も酷似した胎土を有する。円筒は、いずれも第1段が著しく長い3条4段で、同じ3条4段のB群の円筒と比べてもかなり法量大きい。主体を占める AT 1 類と

【A 群】

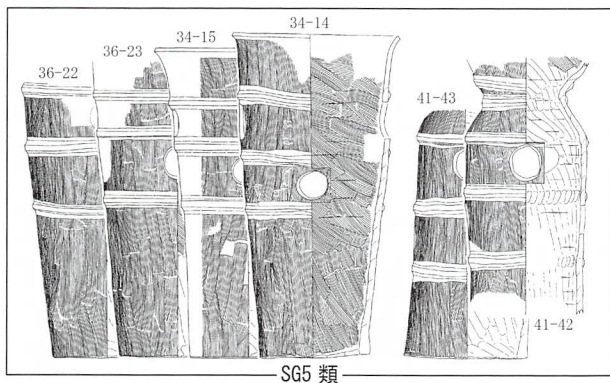


【B 群】

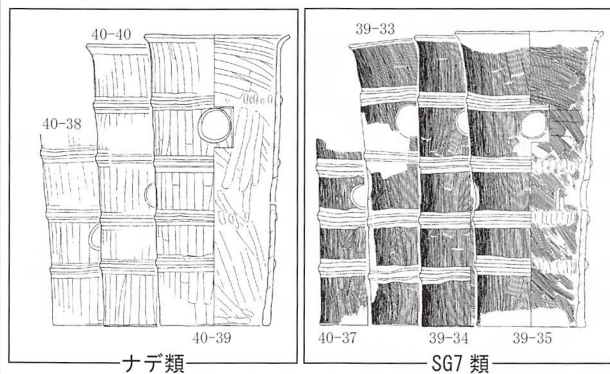


第 8 図 愛宕山古墳出土埴輪の分類

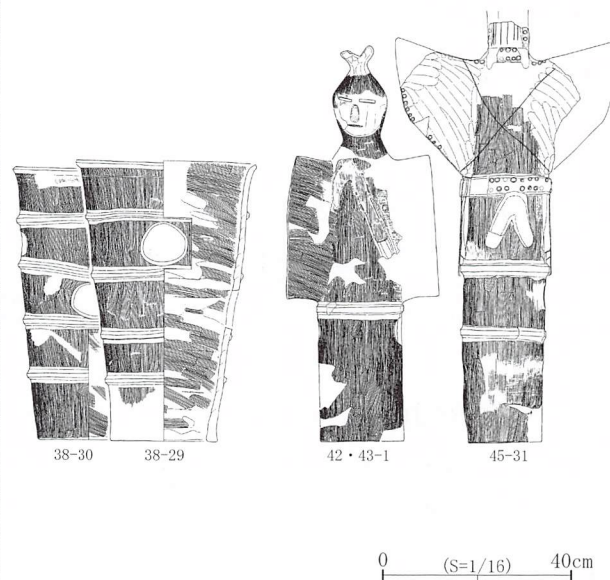
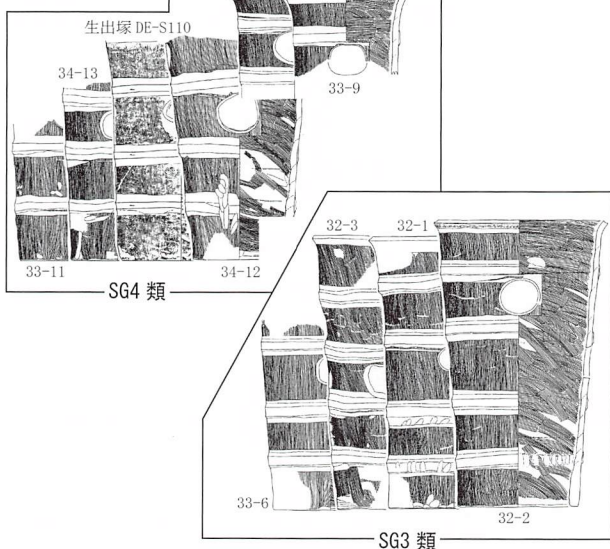
【A 群】



【B 群】



【C 群】



第 9 図 将軍山古墳出土埴輪の分類

AT 5 類は同一母材の工具である可能性が高い。また、破片資料 3-28-116 など方形透孔も存在するが、混入資料の可能性も残る。形象は全身像を含む人物を確認している。

【B 群】赤褐色の砂粒の少ない胎土を特徴とし、明茶～灰褐色を呈する焼成良好品が多い。AT 2 類は、生出塚遺跡 DE 地点 21・22 号窯で一括焼成された埴輪で、生出塚編年Ⅱ期後半に位置付けられる。小型の 3 条 4 段、突帯が低平でナデ幅が広いのが特徴である。後述する將軍山 C 群 SG 3 類と同じ刷毛目で、同時期の製作品である。なお、形象では大刀を確認している。

3-8 將軍山古墳（第 9 図）

將軍山古墳出土埴輪については、岡本健一の的確な分類（岡本 1997）をそのまま踏襲する。ここでは分類名称を変更し、A・B・C 群に 3 分類する。

【A 群】岡本分類 B 類が該当する。橙褐色で著しく砂粒の多い胎土を特徴とする。器高半分に達するほど第 1 段が長い 3 条 4 段で、前述した愛宕山 A 群に酷似する。しかし、突帯が愛宕山 A 群よりも扁平化し、第 1 段が高くなっている点などより後出的な特徴を有する。大半が SG 5 類の刷毛目で調整される同工品である。

【B 群】岡本 C 1・C 2 類が該当する。橙褐色を基本とし、焼成の硬質な個体が多い。後円部北側周辺から集中的に出土した埴輪群である。岡本が細分しているように、若干距離のある埴輪群を含む。岡本が C 2 類とした板ナデ調整による個体群（40-38・40-39・40-40）と SG 7 類の個体群は、寸胴な 4 条 5 段の形態がよく似ている。一方で、岡本が C 1 類とする 38-29 や 38-30 などの個体は、形態的に見れば生出塚窯産の C 群と類似する。なお、形象では盾持人・鞍が確認できる。

【C 群】岡本 A 類が該当する。赤褐色の砂粒の少ない胎土を特徴する。岡本が生出塚窯産であることを想定した通り、SG 3 類・SG 4 類は生出塚遺跡 DE 地点出土品と刷毛目が一致する。4 条 5 段の中型品で、特に SG 3 類は愛宕山 B 群 AT 2 類と同じ刷毛目の別規格品である。同じく生出塚編年Ⅱ期後半に位置付けられる。なお、C 群は將軍山古墳出土埴輪で主体を占める。

3-9 鉄砲山古墳（第 10 図）

鉄砲山古墳出土埴輪はすべて赤褐色系統で、生出塚窯産であることが確定している。現状では報告品の破片資料にも橙褐色系統を確認していないが、近年、発掘調査も進んでおり、新しい分類群が確認される可能性もあるので、ここでは A 群と呼称する。

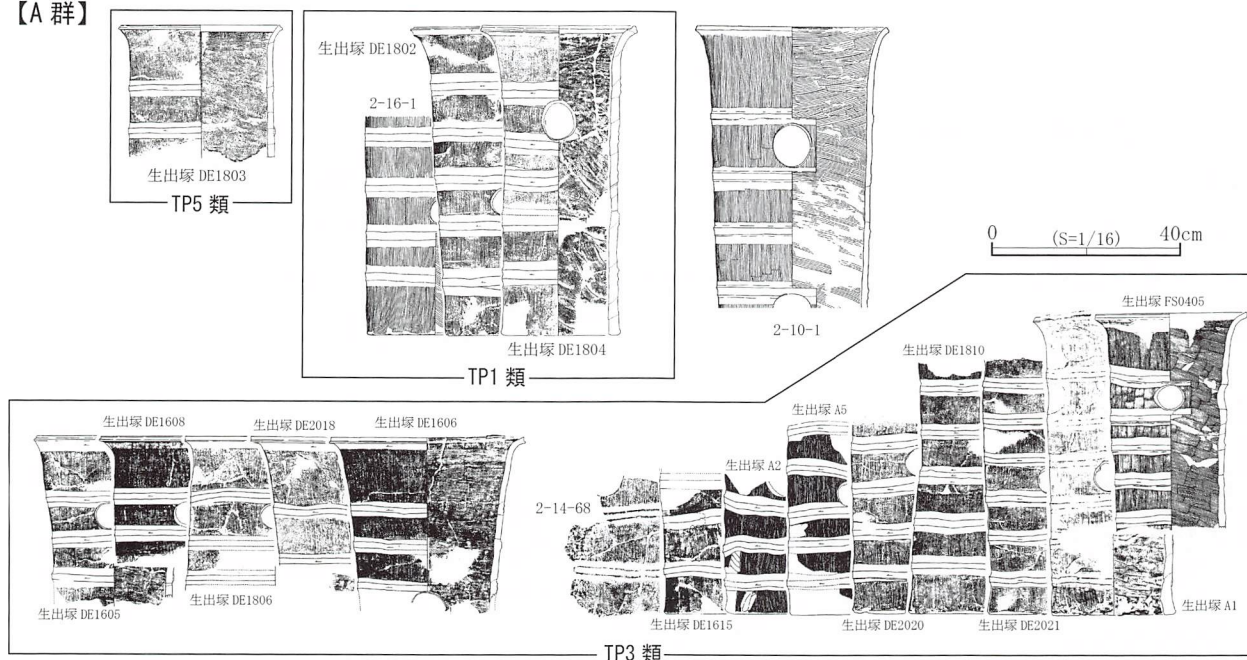
【A 群】赤褐色の砂粒の少ない胎土を特徴とする。図示した TP 1 類・TP 3 類・TP 5 類ともに生出塚遺跡 DE 地点 18・16・20 号窯で焼成されている。寸胴で裾広がりの個体も多い大型多条の円筒である。前述した愛宕山 B 群 AT 2 類・將軍山 C 群 SG 3 類が焼成された 21・22 号窯を切る窯で焼成されており、愛宕山古墳・將軍山古墳に続く生出塚編年Ⅲ期前半に位置付けられる。

3-10 中の山古墳（第 11 図）

中の山古墳からは「須恵質埴輪壺」が出土している⁽¹⁾。近年、太田博之が分類とその位置付けを行っている。その分類を基本とし、A・B・C 群に 3 分類する。

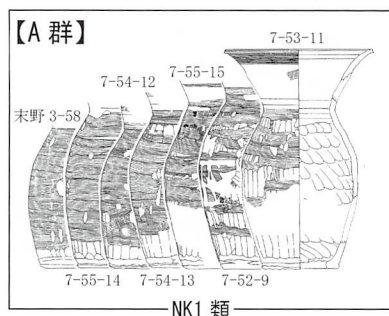
【A 群】太田 A 類が該当する。外面に回転ヨコハケを有する青灰色の一群である。従来から、埼玉県寄居町の須恵器生産遺跡である末野 3 号窯で焼成された可能性が指摘されてきたが（福田 1998）、

【A 群】

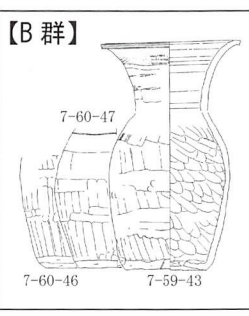


第10図 鉄砲山古墳出土埴輪の分類

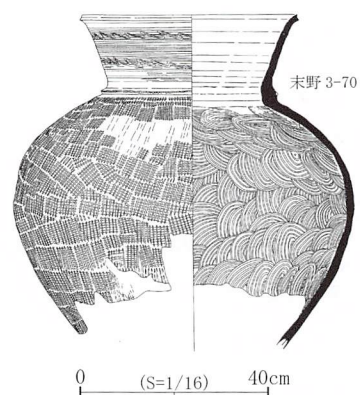
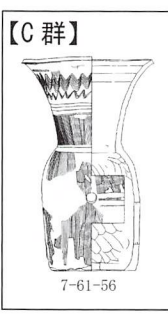
【A 群】



【B 群】



【C 群】



第11図 中の山古墳出土埴輪の分類と末野3号窯出土須恵器

刷毛目の合致によって供給関係が確定した。第11図には、末野3号窯で同時焼成された須恵器も図示した。TK209型式とされる須恵器である。

【B群】太田B類が該当する。外面をナデ調整する酸化焰焼成の明黄褐色の一群である。

【C群】太田C類が該当する。外面をタテハケ調整し、口縁部外面に波状文を有する一群である。

4 刷毛目分析と産地の特定

ここまで埼玉古墳群の各古墳から出土した埴輪の分類についてまとめた。これら分類の妥当性を検証するとともに、その分類群の生産地を明らかにするため、刷毛目の分析成果についてまとめる。埼玉古墳群出土埴輪の刷毛目データベースについては、第1図に一括して原寸写真を提示した。基本的には各古墳を単位として通し番号を設定し、生産地の刷毛目と一致するものは第1表にその関

係を明示した上で写真によって一致状況を示している。

4-1 各古墳出土埴輪の刷毛目データベース

【稲荷山古墳】IN 1～IN21の刷毛目を設定した。群を越えた刷毛目の一致例はなく、分類の妥当性を確認できる。A群では、B種ヨコハケが全てIN11で調整される点が注目される。また、C群においてもIN 1が極めて共通性の高い埴輪群に確認された。このように同一刷毛目が認められる類型（刷毛目共通類型）が基本的に型式的距離の近い埴輪群で構成される点は、各生産地の分析で明らかになっているが（城倉2010 a・2010 b）、生産地の判明していない分類群においても基本的に同じである。刷毛目共通類型は、限られた工人によって限られた期間に製作されたという前提はかなり普遍的な現象と考えることができる。

【丸墓山古墳】MH 1～MH 8の刷毛目を設定した。群を越えた刷毛目の一致例はない。C群では、MH 5の刷毛目が普通円筒と「雷電山復古型」に認められた。

【天祥寺裏古墳】TS 1～TS 5の刷毛目を設定した。群を越えた刷毛目の一致例はない。A群ではTS 1が生出塚W 4、TS 2が生出塚W 1と合致した。

【二子山古墳】FT 1～FT12の刷毛目を設定した。群を越えた刷毛目の一致例はない。B群では、FT 4が桜山Gと合致した。C群ではFT 1が生出塚DE 8、FT 8が生出塚M 6と合致した。

【瓦塚古墳】KZ 1～KZ20の刷毛目を設定した。群を越えた刷毛目の一致例はない。B群ではKZ 3が毛塚28号墳Cと合致した。C群ではKZ 1が生出塚DE 8と合致した。

【奥の山古墳】OY 1～OY 7の刷毛目を設定した。群を越えた刷毛目の一致例はない。B群ではOY 2が生出塚DE13、OY 4が生出塚DE19、OY 5が生出塚DE12、OY 6が生出塚DE 6に合致した。

【愛宕山古墳】AT 1～AT 8の刷毛目を設定した。群を越えた刷毛目の一致例はない。B群ではAT 2が生出塚DE 9と合致した。

【将軍山古墳】SG 1～SG10の刷毛目を設定した。群を越えた刷毛目の一致例はない。C群ではSG 3が生出塚DE 9、SG 4が生出塚DE27に合致した。

【鉄砲山古墳】TP 1～TP 7の刷毛目を設定した。TP 1が生出塚DE16、TP 3が生出塚DE 5、TP 4が生出塚DE 8、TP 5が生出塚DE31、TP 6が生出塚DE13、TP 7が生出塚DE44と合致した。そのうち、TP 4とTP 6の刷毛目を持つ個体は、それぞれ瓦塚古墳・奥の山古墳からの流れ込み資料の可能性が高い。

【中の山古墳】NK 1・NK 2の刷毛目を設定した。群を越えた刷毛目の一致例はない。A群ではNK 1が末野Aと合致した。

4-2 生産地の特定

埼玉古墳群における刷毛目データベースの構築によって、各古墳の分類の妥当性が証明された。また、刷毛目共通類型が極めて限られた工人によって限られた期間に製作された点も推定できた。最後に、刷毛目の同定から生産地が特定できている例について、対応関係をまとめておく。

【生出塚窯】(TS 1=W 4) (TS 2=W 1) (FT 1=KZ 1=TP 4=DE 8) (FT 8=M 6) (OY 2=TP 6=DE13) (OY 4=DE19) (OY 5=DE12) (OY 6=DE 6) (AT 2=SG 3=DE 9) (SG 4=DE27) (TP 1=DE16) (TP 3=DE 5) (TP 5=DE31) (TP 7=DE44)

【桜山窯周辺】(FT 4 = 桜山G = 毛塚32B = 諏訪山 7 号周溝) (KZ 3 = 毛塚28C)

【末野窯】(NK 1 = 末野A)

以上、現状では埼玉古墳群出土埴輪のうち、21種類の刷毛目共通類型の生産地が特定できていることになる。特に、生出塚窯産埴輪の刷毛目一致率は非常に高く、その生産窯までほぼ特定できている。今後の研究で、他の窯との刷毛目一致率も上がっていくことが予想される。

5 埼玉古墳群出土埴輪の系統と編年

5-1 大別と細別

前節まで埼玉古墳群の各古墳から出土した埴輪の分類を行った。ここでは、各古墳での分類成果をもとにして、古墳群全体の中で系統関係を整理し、編年を確立する。

まず、埼玉古墳群出土埴輪全体が大きく①黄白色系統、②橙褐色系統、③赤褐色系統に大別できる点は既に指摘した。しかし、各古墳での分類成果を踏まえれば、更なる細別が可能である。以下、系統の細別基準を明記すると共に、各古墳の分類単位との対応関係を示す。

【黄白色A】稲荷山A群・丸墓山A群・二子山A群が該当する。黄白色の特徴的な胎土の一群で、円筒の客体的なB種ヨコハケ・半円透孔・赤彩を特徴とする。

【黄白色B】瓦塚A群が該当する。黄白色Aに比べて、色調がクリーム色に近い。円筒は円形透孔を基本とし、赤彩は認められない。黄白色Aより新相を示す。

【橙褐色A】稲荷山B群・丸墓山B群・二子山B群・瓦塚B群・奥の山A群が該当する。にぶい橙褐色～ピンク色を特徴とする。円筒の特徴は多様だが一連の流れの中で位置付けられる埴輪群である。稲荷山B群では最下段が長い円筒が、徐々に最下段が短くなる。二子山B群では方形透孔の個体が認められ、瓦塚B群では円筒の小型化が認められる。なお、二子山B群・瓦塚B群に関しては、前述したように桜山窯周辺での生産を確認しており、「プレ桜山」の特徴的な埴輪群である。

【橙褐色B】愛宕山A群・將軍山A群が該当する。砂粒の著しく多い胎土で、円筒の最下段が著しく長い特徴的な埴輪群である。

【橙褐色C】將軍山B群が該当する。焦げ茶褐色に近い橙褐色を特徴とする。円筒は寸胴な4条5段で、將軍山古墳で共伴しながら橙褐色Bとは形態が大きく異なる。

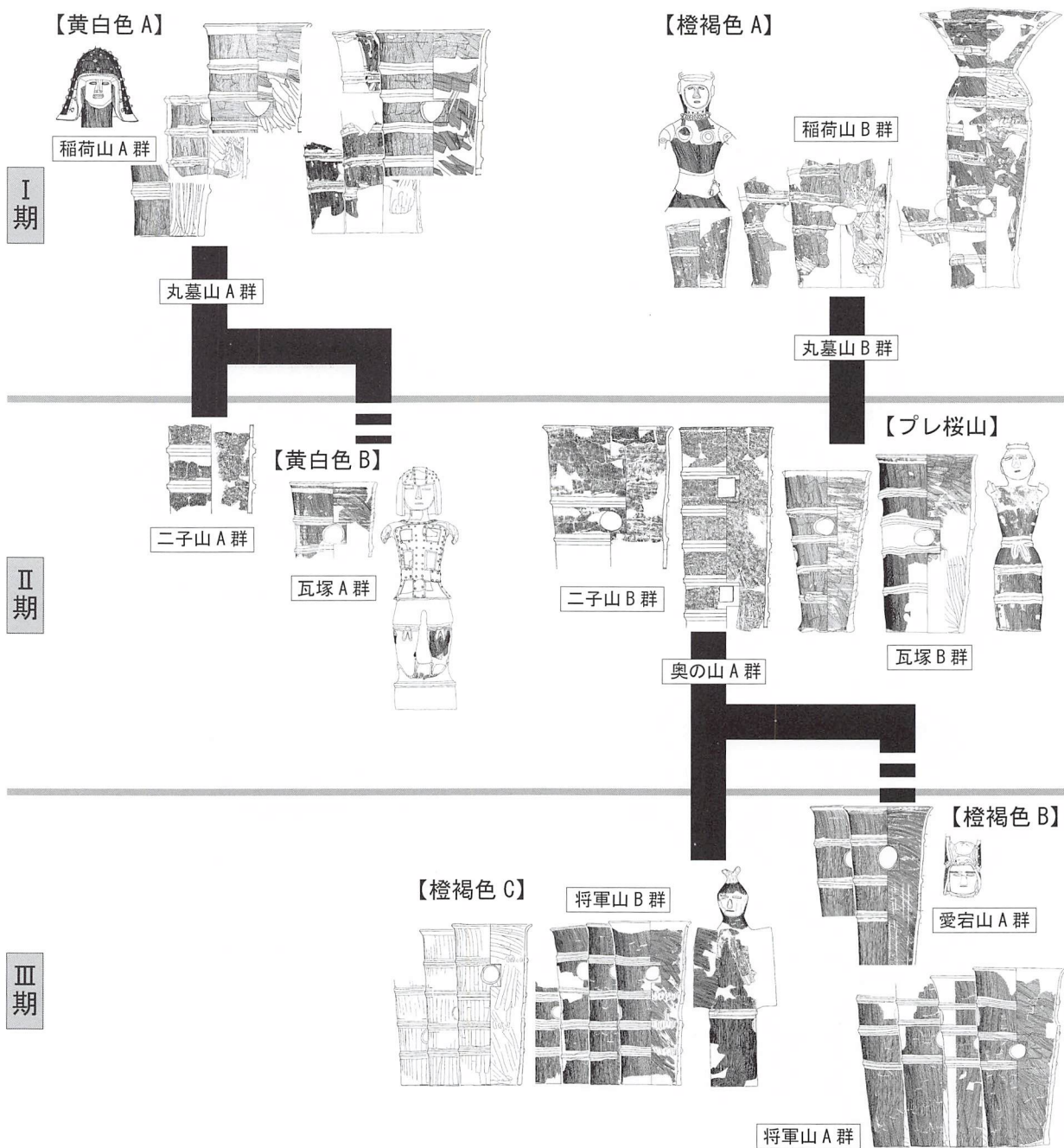
【赤褐色A】稲荷山C群・丸墓山C群が該当する。最下段と段間が短く設定される細身の円筒を特徴とし、明らかに二子山古墳・瓦塚古墳以降の生出塚窯産埴輪に繋がる特徴を有する埴輪群である。橙褐色Aから派生した系統である。

【赤褐色B】天祥寺裏A群・二子山C群・瓦塚C群・奥の山B群・愛宕山B群・將軍山C群・鉄砲山A群が該当する。刷毛目の同定から生出塚窯産と判明している(城倉2010a)。

5-2 系統関係の整理と画期の設定

各古墳出土埴輪の分類と古墳群全体の大別・細別について述べてきた。それらを総合的にまとめて、埼玉古墳群出土埴輪の系統関係を整理する。

第12図には、埼玉古墳群出土埴輪の系統関係を整理した編年図を提示した。各古墳出土埴輪の分析で分解した分類群を、系統の大別と細別に基づいて組み直せば、極めて整合的な編年が確立する。そして、埴輪生産の画期に基づいて埼玉古墳群を編年するならば、I～IV期の編年が可能である。



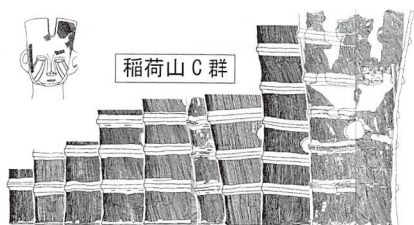
※実線は系譜関係が明瞭、破線は系譜関係が想定される

		黄白色 A	黄白色 B	橙褐色 A	橙褐色 B	橙褐色 C	赤褐色 A	赤褐色 B	埴輪壺
I	稲荷山	A 群		B 群			C 群		
	丸墓山	A 群		B 群			C 群		
	天祥寺裏							A 群	
II	二子山	A 群		B 群				C 群	
	瓦塚		A 群	B 群				C 群	
	奥の山			A 群				B 群	
III	愛宕山				A 群			B 群	
	将軍山				A 群	B 群		C 群	
	鉄砲山							A 群	
IV	中の山								A～C 群

※各古墳出土埴輪の分類群と系統の対応関係を示す

第12図 埼玉古墳群出土埴輪の系統と編年①

【赤褐色 A】



稲荷山 C 群

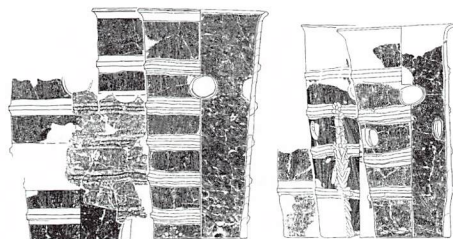
丸墓山 C 群

【赤褐色 B】 生出塚中型品系列



天祥寺裏 A 群

【赤褐色 B】 生出塚大型品系列

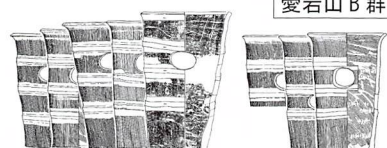


二子山 C 群

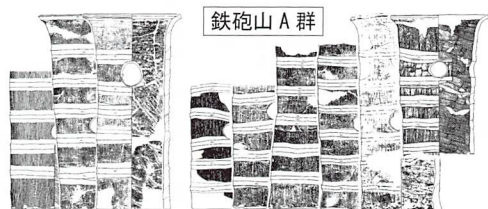
瓦塚 C 群



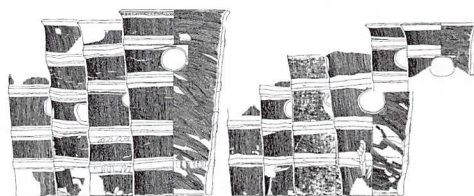
奥の山 B 群



愛宕山 B 群

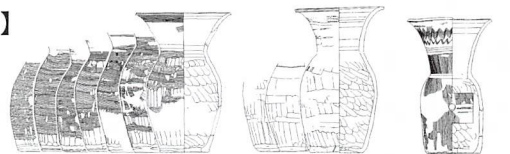


鉄砲山 A 群



将軍山 C 群

【埴輪壺】



中の山 A 群

中の山 B 群

中の山 C 群

0 (S=1/25) 40cm

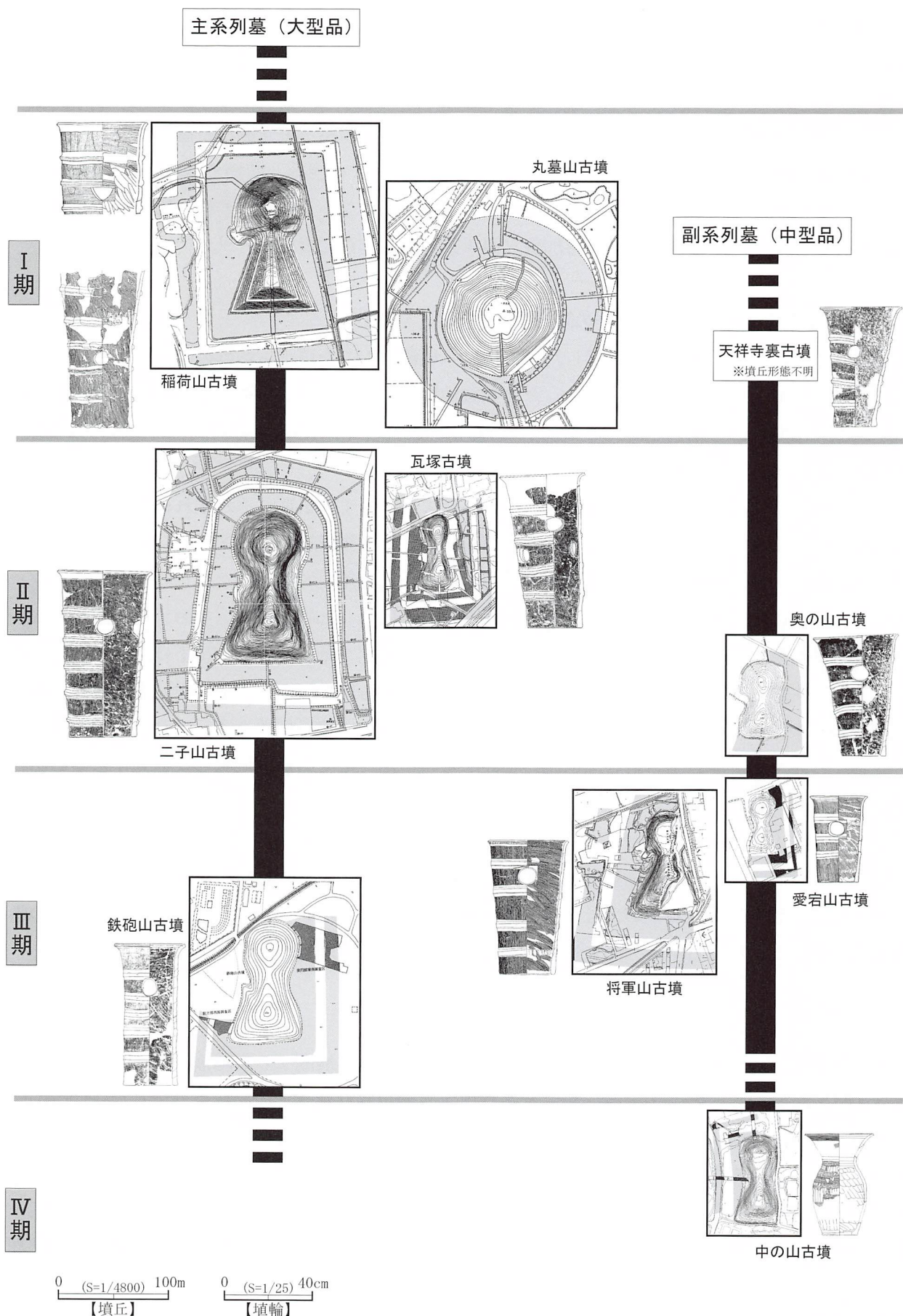
第12図 埼玉古墳群出土埴輪の系統と編年②

まず、各系統の時間軸を整理しよう。再三述べてきたように、赤褐色Bの生出塚窯産埴輪に関しては、窯の物理的前後関係から既に動かない編年が確立している。天祥寺裏→二子山→瓦塚→奥の山→愛宕山→將軍山→鉄砲山である。問題は稲荷山・丸墓山だが、両古墳には赤褐色Aの埴輪が認められた。その中で稲荷山C群IN1類の円筒が、二子山C群FT1類・FT8類に直接繋がり得る特徴を持つ点は前述した通りである。一方、丸墓山C群はその間を埋める資料なので、赤褐色系統の一連の変遷からみて、稲荷山→丸墓山→天祥寺裏→二子山→瓦塚→奥の山→愛宕山→將軍山→鉄砲山の順序が確定する。すなわち、生出塚の埴輪は、稲荷山B群から生まれた稲荷山C群のIN1類を直接の祖形として発展したのである。さらに、生出塚窯産円筒埴輪には大型品と中型品2系列の存在を確認できるが(城倉2009)、両系列ともに①器形の寸胴化、②突帯の扁平化が進む順調な変遷を読み取ることができる。

次に、黄白色Aは稲荷山において主体をなすが、丸墓山・二子山ではわずかな破片資料しか存在しない。客体的なB種ヨコハケ・半円透孔・突帯板押圧技法・赤彩などの特徴は、確かに埼玉古墳群中最も古い要素を持っている。この黄白色系統が他系統と稲荷山などで共伴する事実をもって、若松は追加樹立の可能性を指摘するわけだが、実は古手の埴輪の特徴とされる板押圧技法や朝顔の擬口縁などは稲荷山B群にも認められる。また、稲荷山A群・B群・C群の各群に認められる人物埴輪の特徴を見ても、いずれも古い様相を示しており、稲荷山における各群の並存は、同時期に活動した異なる集団の生産品が供給された事実を示すと考えるほうが自然である。実際に、新屋敷古墳群・月輪古墳群・鎧塚古墳など黄白色系統が出土する古墳では、必ず橙褐色系統が共伴している。すなわち、この時期の黄白色系統と橙褐色系統の共伴は、むしろ普遍的な現象なのである。やはり、黄白色Aと橙褐色Aは同時期に存在した別集団とすべきである。さらに、量は少ないながらも黄白色Bとした瓦塚A群が、黄白色Aの系譜を引く埴輪である事実も上記の年代観を裏付ける。

最後に、橙褐色系統の変遷をまとめる。橙褐色Aについては、稲荷山において黄白色Aと同時期に存在した点が推定された。稲荷山B群には、突帯下側につく板押圧技法・朝顔擬口縁など、二子山以降の埴輪には認められない特徴があり、やはり古く位置付けるのが自然である。さらに、稲荷山B群は、桜山窯周辺での生産が判明している二子山B群・瓦塚B群(プレ桜山)にスムーズに繋がる特徴を備えている点が注目される。すなわち、最下段と最上段が長めで、段間が短く設定されるのが橙褐色Aの円筒全体に通じる特徴である。この橙褐色Aの円筒の系譜を引くのが、橙褐色Cとした將軍山B群である。將軍山B群の均等な段間の4条5段は、瓦塚B群円筒の器形を寸胴化させたものである。また、將軍山B群の盾持人も、瓦塚B群の盾持人とよく似ていることが知られ、その系譜関係を確認できる。一方、砂粒が著しく多い胎土を特徴とする橙褐色Bはその位置付けが難しいものの、桜山窯製品に最下段の長い類型が存在するので(城倉2010b)、やはり橙褐色Aの系譜を引くものと考えることができる。

このように各系統の埴輪は比較的スムーズな変遷を辿ることが明らかになり、分類作業によって埼玉古墳群の各古墳の前後関係が確定した。次には埴輪生産の画期に基づき、その段階を設定する。まず、稲荷山古墳から始まる埼玉古墳群造営の中で大きな画期となるのは、生出塚窯における大規模生産開始の契機となった二子山古墳の出現である。この画期をもってII期を設定する。これ以後、鉄砲山古墳に至るまで、生出塚窯は埼玉古墳群へ大型品・中型品を専属的に供給するようになる。次なる画期は、橙褐色系統の橙褐色Aが大きく変質し、橙褐色B・Cが登場する愛宕山古墳・將軍



第13図 墳輪からみた埼玉古墳群の階層構造

山古墳の出現である。この画期をもってⅢ期を設定する。その後、埼玉古墳群への埴輪供給は鉄砲山古墳を最後に終焉し、中の山古墳に須恵質埴輪壺が供給される。この画期をもってⅣ期を設定する。以上、埼玉古墳群における埴輪生産の画期を踏まえれば、埼玉古墳群Ⅰ～Ⅳ期（段階）の設定が可能である。

以上、埼玉古墳群出土埴輪の系統整理によって、各古墳の埴輪を整合的に位置付けることができた。各系統の展開を追うことで、全ての分類群がほぼスムーズに縦軸と横軸で結ばれたことになる。ここまで状況証拠を積み上げれば、改めて議論をする必要はないだろう。若松の想定する「追加樹立」は存在しない。故に、若松の「追加樹立編年案」は完全な虚構である⁽²⁾。

5-3 埴輪からみた埼玉古墳群の階層構造

埼玉古墳群のⅠ～Ⅳ期編年を提示した。最後に、埴輪からみた埼玉古墳群の階層構造についてまとめる(第13図)。埼玉古墳群を中心とした北武蔵地域に関しては、増田逸朗が墳丘規模と円筒の条数に基づく階層構造を指摘している(増田1987)。ここでは、増田の視点に時間軸と埴輪の系統差・系列差を加えて、埼玉古墳群の階層構造を復原する。

まず、本稿で確立した埼玉古墳群Ⅰ～Ⅳ期編年によれば、Ⅰ～Ⅲ期にそれぞれ稲荷山古墳・二子山古墳・鉄砲山古墳という5条以上の大型円筒を樹立する大規模埴輪系列がスムーズに展開する。私は以前、生出塚窯産埴輪の分析で大型品と中型品の2系列の差異を抽出したが(城倉2009)、まさにその大型品が供給される古墳系列である。これを「主系列墓」と呼称する。なお、稲荷山古墳に続いて大型品が供給された丸墓山古墳と、二子山古墳と同時期で条数を意図的に下げた大型品が供給される瓦塚古墳もこの系列に含めておく。一方、天祥寺裏古墳・奥の山古墳・愛宕山古墳は、生出塚窯産の3条もしくは4条の中型品を樹立する規模の小さい古墳系列である。これを「副系列墓」と呼称する。なお、愛宕山古墳と同工品が存在する將軍山古墳、須恵質埴輪壺を樹立する中の山古墳もこの系列に含めておく。

このように、埼玉古墳群において、おそらく被葬者の階層差を反映するであろう2系列を見出すことができた。主系列墓が「国造墓」と想定されるのは言うまでもないが、Ⅲ期に主系列墓が衰退する一方で、副系列墓の規模が大きくなるのは偶然であろうか。いずれにしても、この2系列の階層構造の存在が、埼玉古墳群の歴史性の一端を示しているのは間違いない。

おわりに

埼玉古墳群の埴輪編年がようやく確立した。北武蔵の各地に展開する埴輪窯跡群—生出塚窯・馬室窯・姥ヶ沢窯・権現坂窯・桜山窯・和名窯から出土し報告された全ての埴輪を分析し(城倉2010a・2010b)、各生産地における様相を把握した上で、北武蔵地域の頂点に位置する埼玉古墳群出土埴輪の系統整理と編年を行った。その結果、埼玉古墳群には、①黄白色系統(5C末～6C初に北武蔵の集中した場所で生産された製品)、②橙褐色系統(比企・大里方面の生産窯の製品)、③赤褐色系統(生出塚窯産製品)の3系統が供給されている事実を確認し、それら系統相互の系譜関係を整理した。この成果によって、埼玉古墳群を頂点とする階層秩序のもとで、各地に活動した生産集団の様相が垣間見えてきた。

また、埼玉古墳群出土埴輪の系統整理によって、稲荷山→丸墓山→天祥寺裏→二子山→瓦塚→奥

の山→愛宕山→将軍山→鉄砲山→中の山という埼玉古墳群の主要古墳の築造順序が確定し、埴輪生産の画期からみた埼玉古墳群のⅠ～Ⅳ期編年が確立した。この編年の確立によって、埼玉古墳群の中で「主系列墓」と「副系列墓」の階層構造を抽出することができた。従来の墳丘規模と円筒条数だけに基づく素朴な階層論を一步進めて、時間軸の中で埴輪の系統も踏まえた階層差の抽出に成功した点は重要である。

さらに、本稿で確立した埼玉古墳群の埴輪編年に基づけば、今後、埼玉古墳群の歴史性をより深く掘り下げる議論が可能になる。最後に、今後焦点となるべき幾つかの議論を整理しておく。①「国造墓」と目される「主系列墓」が各期に1基ずつ築造される中で、稲荷山古墳と二子山古墳に挟まれる形で日本最大の円墳である丸墓山古墳が築造されたのはなぜか。②稲荷山古墳と丸墓山古墳出土埴輪のみに、比企系の「雷電山復古型」が認められるのはなぜか。③Ⅱ期の二子山古墳・瓦塚古墳の埴輪生産を画期として、生出塚遺跡で大規模生産が始まるのはなぜか。④Ⅲ期の「主系列墓」にみられる衰退現象の一方で、「副系列墓」に内容が卓越し墳丘形態も全く異なる将軍山古墳が出現するのはなぜか。⑤Ⅲ期の鉄砲山古墳を最後に、埼玉古墳群への生出塚窯産大型品の供給がストップする一方で、代わって遠距離供給用にスリム化された小型品が東京湾にまで供給域を拡大するのはなぜか。

このように議論すべき問題は多い。これらの論点については、埼玉古墳群における埴輪以外の要素を深く分析し、北武蔵地域の古墳時代後期の様相を広い視野で整理した上で、改めて論じたい。

※本稿は、科学研究費補助金（若手研究B『古代工房の復元的比較研究—埴輪・須恵器・瓦の工房を中心に—』課題番号20720217：城倉正祥）の成果である。

謝辞

本稿の掲載に際しては、鈴木敏昭館長と中村倉司氏に多大なご配慮を頂きました。また、君島勝秀氏・利根川章彦氏には、報告書掲載全個体の調査という無理なお願いにご配慮を頂き、度重なる資料調査にも丁寧に対応して頂きました。さらに、埼玉古墳群の埴輪研究の先学である若松良一氏・岡本健一氏には、特に論文で多くの示唆を頂きました。結果的に両氏の見解とは異なる結論を導き出した点も多いが、両氏の真摯な研究姿勢に深い感銘を受けました。最後に、資料調査の際にお世話になった方々のご芳名を記すとともに、すべての方々に心からの感謝を申し上げます。

大久根茂・篠田泰輔・杉崎茂樹・田中英司・田中正夫・伝田郁夫・中島洋一・大和修（五十音順、敬称略）

《註》

- (1) 中の山古墳出土土器については、報告者が「須恵質埴輪壺」と呼称する（若松1989）。一方、朝鮮半島からの系譜を重視し「有孔平底壺系円筒形土器」と呼称する立場（太田2006など）もある。しかし、中の山古墳の土器が在地の埴輪・須恵器の製作技術系譜上にある点は多くの意見が一致しているので、わざわざ難解な呼称を使う必要はない。若松の「須恵質埴輪壺」は、モノの性質と歴史性をよく表現した極めて的確な用語だと思う。私は「須恵質埴輪壺」の呼称を用いる。
- (2) 本稿では、若松の重要な指摘である「追加樹立説」を真摯に受け止めた上で、その可能性を詳細に検討し、批判的立場に至ったものである。なお、本稿はあくまでも埼玉古墳群に関する分析に基づく結論をまとめただ

けであって、一般論としての「追加樹立説」を否定するものではない。

《引用文献》

- 犬木 努 2005 「下総型埴輪再論」『埴輪研究会誌』第9号
- 太田 博之 2006 「埼玉県中の山古墳出土の有孔平底壺系円筒形土器」『考古学雑誌』第90巻第2号
- 岡本 健一 1997 「確認調査のまとめ」『将軍山古墳』埼玉県教育委員会
- 城倉 正祥 2009 『埴輪生産と地域社会』学生社
- 城倉 正祥 2010 a 「生出塚窯産円筒埴輪の編年と生産の諸段階」『考古学雑誌』第94巻第1号
- 城倉 正祥 2010 b 「生産地分析からみた北武蔵の埴輪生産」『考古学研究』第57巻第2号
- 轟 俊二郎 1973 『埴輪研究』第1冊
- 中井正幸他 2003 『昼飯大塚古墳』大垣市教育委員会
- 廣瀬 覚 2003 「柳井茶臼山古墳の埴輪とその生産組織」『立命館大学考古学論集』III 立命館大学
- 廣瀬 覚 2006 「五色塚古墳と前期後葉の埴輪生産」『史跡五色塚古墳 小壺古墳発掘調査・復元整備報告書』神戸市教育委員会
- 古谷 毅 2003 『埴輪工人の移動から見た古墳時代前半期における技術交流の政治史的研究』科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書 東京国立博物館
- 増田 逸朗 1987 「埼玉政権と埴輪」『埼玉の考古学』新人物往来社
- 若松 良一 1982 「同一古墳における円筒埴輪の多様性の分析」『法政考古学』第7集
- 若松 良一 2007 「稲荷山古墳の埴輪と提起される諸問題」『武蔵埼玉稲荷山古墳』埼玉県教育委員会

《報告書一覧》

【岩鼻古墳群】宮島秀夫 1989『岩鼻遺跡』東松山市教育委員会／江原昌俊 1993『岩鼻遺跡(第2次)』東松山市教育委員会【姥ヶ沢・権現坂埴輪窯】新井端・森田安彦 1998『千代遺跡群—弥生・古墳時代編—』江南町教育委員会【生出塚埴輪窯】山崎武 1981『生出塚遺跡』鴻巣市遺跡調査会／山崎武 1987『鴻巣市遺跡群II(A地点)』鴻巣市教育委員会／山崎武 1987・1994『鴻巣市遺跡群III(D・E地点)』鴻巣市教育委員会／山崎武 1999『生出塚遺跡(P地点)』鴻巣市遺跡調査会／山崎武 2001『鴻巣市遺跡群IX(J地点)』鴻巣市教育委員会／山崎武 2002『鴻巣市遺跡群X(M地点)』鴻巣市教育委員会／山崎武 2004『鴻巣市遺跡群11(N・X・30・33・37・41地点)』鴻巣市教育委員会／山崎武 2005『生出塚遺跡(35・39・45・46地点)』鴻巣市遺跡調査会／山崎武 2006『鴻巣市遺跡群12(W地点)』鴻巣市教育委員会【亀塚古墳】狛江市史編纂委員会 1985『狛江市史 原始古代』【毛塚古墳群】宮島秀夫 2003『杉の木遺跡(第3次)』東松山市教育委員会／大谷徹 2006『杉の木遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団【埼玉愛宕山古墳】小久保徹ほか 1985『愛宕山古墳』埼玉県教育委員会／斉藤国夫 1994「愛宕山古墳」『埼玉古墳群発掘調査報告書』行田市教育委員会【埼玉稲荷山古墳】斉藤忠・柳田敏司・栗原文蔵 1980『埼玉稲荷山古墳』埼玉県教育委員会／若松良一 1992「埼玉稲荷山古墳中堤発見の朝顔形円筒埴輪」『調査研究報告』第5号 埼玉県立さきたま資料館／若松良一 2003「資料報告 武蔵埼玉稲荷山古墳出土の埴輪I」『調査研究報告』第16号 埼玉県立さきたま資料館／若松良一 2004「資料報告 武蔵埼玉稲荷山古墳出土の埴輪II」『調査研究報告』第17号 埼玉県立さきたま資料館／若松良一 2005「資料報告 武蔵埼玉稲荷山古墳出土の埴輪III」『調査研究報告』第18号 埼玉県立さきたま資料館／若松良一 2006「資料報告 埼玉稲荷山古墳出土家形埴輪の復原について」『調査研究報告』第19号 埼玉県立さきたま資料館／柳田敏司ほか 2007『武蔵埼玉稲荷山古墳』埼玉県教育委員会【埼玉奥の山古墳】若松良一ほか 1989「奥の山古墳の調査」『奥の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳』埼玉県教育委員会【埼玉瓦塚古墳】杉崎茂樹ほか 1986『瓦塚古墳』埼玉県教育委員会／塚田良道 1988『瓦塚古墳・下埼玉通遺跡』行田市教育委員会／若松良一ほか 1989「瓦塚古墳の調査」『奥の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳』埼玉県教育委員会／若松良一 1992「瓦塚古墳の調査」『二子山古墳・瓦塚古墳』埼玉県教育委員会／若松良一・日高慎 1992「形象埴輪の配置と復元される葬送儀礼(上)」『調査研究報告』第5号 埼玉県立さきたま資料館／若松良一・日高慎 1993「形象埴輪の配置と復元される葬送儀礼(中)」『調査研究報告』第6号 埼玉県立さきたま資料館【埼玉将軍山古墳】杉崎茂樹 1988「将軍山古墳」『丸墓山古墳・埼玉1～7号墳・将軍山古墳』埼玉県教育委員会／岡本健一 1997『将軍山古墳』埼玉県教育委員会【埼玉鉄砲山古墳】杉崎茂樹・小久保徹 1985『鉄砲山古墳』埼玉県教育委員会【埼玉天祥寺裏古墳】斉藤国夫 1994「天祥寺裏古墳」『埼玉古墳群発掘調査報告書』

行田市教育委員会【埼玉中の山古墳】若松良一ほか 1989「中の山古墳の調査」『奥の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳』埼玉県教育委員会／斉藤国夫 1994「中の山古墳」『埼玉古墳群発掘調査報告書』行田市教育委員会【埼玉二子山古墳】杉崎茂樹ほか 1987『二子山古墳』埼玉県教育委員会／若松良一ほか 1992「二子山古墳の調査」『二子山古墳・瓦塚古墳』埼玉県教育委員会／斉藤国夫 1994「二子山古墳」『埼玉古墳群発掘調査報告書』行田市教育委員会【埼玉丸墓山古墳】杉崎茂樹 1988「丸墓山古墳の調査」『丸墓山古墳・埼玉1～7号墳・將軍山古墳』埼玉県教育委員会【桜山埴輪窯】横川好富 1982『日本住宅公団高坂丘陵地区埋蔵文化財調査報告VI—桜山窯跡群—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団【下松古墳群】江原昌俊・長井正欣 2004『上松本遺跡（第2次）』東松山市遺跡調査会【下道添遺跡】渡辺久生 1981『野本東部遺跡群発掘調査報告書—下道添・東町・古吉海道遺跡』東松山市教育委員会／坂野和信 1987『下道添遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団【新屋敷古墳群】高崎光司 1992『新屋敷遺跡B区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団／田中正夫 1994『新屋敷遺跡A区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団／金子直行・大谷徹 1996『新屋敷遺跡C区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団／屋間孝志・大谷徹 1998『新屋敷遺跡D区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団【末野窯】福田聖 1998『末野遺跡I』埼玉県埋蔵文化財調査事業団【月輪古墳群】関口正幸・市川康弘 2008『月輪遺跡群』滑川町月輪遺跡群発掘調査会【登山1号墳】今津節生 1992『登山1号墳出土遺物調査報告書』厚木市教育委員会／稲村繁 1997『厚木市登山1号墳出土埴輪修理報告書』厚木市教育委員会【とやま古墳】塩野博 1967『とやま古墳』埼玉県教育委員会【柊塚古墳】野沢均 1992『柊塚古墳範囲確認調査報告書』朝霞市教育委員会／照林敏郎 2001『宮台遺跡第5・6地点発掘調査報告書』朝霞市教育委員会【東宮下】笹森紀巳子 1988『中里遺跡・篠山遺跡』大宮市教育委員会【古凍古墳群】横川好富 1984『一般国道254号線川島バイパス東松山地内埋蔵文化財発掘調査報告書II—古凍根岸裏—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団【屋田古墳群】横川好富 1984『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅷ—屋田・寺ノ台—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団【鎧塚古墳】寺社下博 1981『鎧塚古墳』熊谷市教育委員会【雷電山古墳】埼玉県史編纂室 1986「雷電山古墳」『埼玉県古式古墳調査報告書』【和名埴輪窯】金井塚良一 1983「比企地方の古代窯業生産の研究（I）和名埴輪窯址群の発掘調査」『東洋研究』第66号 大東文化大学／弓明義 2003「新たな埴輪焼成窯を発見」『彩の国埼玉発掘調査速報展2003』

《図表出典一覧》

第1表 資料調査の成果をもとに作成。

第1図 筆者撮影画像をもとに作成。写真については、埼玉県教育委員会・東松山市教育委員会・鴻巣市教育委員会より掲載許可を得た。

第2～11図 資料調査の成果に基づき、各報告書掲載実測図から作成。

第12・13図 各報告書掲載実測図より作成。